毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢

明治二十九年九月十日發兌

第八拾五號

口繪＝瓶わり柴田
社說＝新家計簿
科學＝馬（松ヶ枝）
文苑＝樓上待月（桐迺舍）

六代君（五）　共村子
繼母　はなぶさ
靜御前と李香君　春波生
妾の理想　某女

家政＝目下の衛生、蝶の捕獲及保存
社交＝袷の流行豫報
雜錄＝文から集、千代女が教訓の發句、美風ある小學校及生徒

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

英文 國民之友

○社說に對する批評

本號（第四號）首卷には「臺灣問題」なる一文あり、此の問題たる幾多英才達識の士が、其の解釋法に最も苦心焦慮せる處にして、記者は、劈頭先づ斷案を下だして曰く、東洋唯一の新進國が、此の美島を得たるは「世界の大勢に大關係を及ぼす可き大事件なり」と、吾人は日本が臺灣に於ける政治上の紛擾を一掃せざる間は記者の論ずるが如く、日本たるもの未だ容易に、商業上及び工業上の大利益を博する能はざるを恐る、記者は、臺灣士人を東西の二種に分ち、其の地勢、風俗、人情、文明を比較細說し、兩人種に對して、今後日本政府の採ざる可からざる方針を明示せり、記者は又た臺灣商工業の現狀を概說して、畢竟不振の原因は從來支那政府失策に基くを論じ、今後日本は文明的の商業組織と、金融機關を應用し、行政、司法の區域を畫然たらしめ、將來大に該島の商工業を發達せしむ可しと論述せり、然り吾人は信じて疑はず、支那政府の失政は大に臺灣の發達を妨げたるを、日本若し直に「極東」記者の論ずるが如く正々堂々の政策を實施せんか其の發達や期して俟つ可きなり……（兵庫ニュース）

近日到着したる英文國民之友第五號は幾多必要なる政治的、宗教的記事を以て滿たさる、社說は支那人種に關する記者の意見を發表したるものにして、記者は從來泰西名士の支那に對する觀察は決して、其の眞相を得たるものに非らざるを說き、其の眞價たるや未だ容易に判然せざるものありと論ぜり、換言せば、「極東」記者は滔々たる歐米名家の立論中一新機軸を出だしたるものにして、其の支那の前途を論ずるや、頗ろ見る可きものあり、支那は從來頑固にも保守主義を固持し來れり然れども此の思想たる、日清戰爭に依りて、大に打破せられたれば「極東」記者の希望するが如く支那の政治家が蹶醒するの期も蓋し遠きに非らざる可し、近くば李鴻章伯の歐米巡遊の如き其の結果や、多少見る可きものあるに至る可し、吾人は伯が、歸來支那の開明幸福の爲めに斡旋せんことを希望して止まざるなり、其他「極東」記者の論ぜる支那人の教育及び新思想の注入は、支那を導きて、世界第一流の强大國ならしむる二大政策たるを信じて疑はざるものなり（印度セイロン、「プヂスト」）

「極東」第五號の社說は「支那管見」と題するものにして、記者は支那現今の不振及び進步の希望少きの理由を論じて、支那人の保守的思想と、守錢奴的傾向に即し、之れを矯正するの策を論じ、進んで支那と日本は同じく東洋の兩獨立國にてあり乍ら、其態度の近時著しく異りたる情態を細說し、其の原因を攻究して左記の如く推斷せり……（原因を其儘掲載す）……然り而して、記者は支那の前途は必らずしも、滅亡なりと斷定するを得ざるも、其の改革たるや亦た容易に斷行する能はざるを說かんと欲して、支那現時の政治、宗教、道德の衰頽を始め、世道人心の如何に腐敗せるかを說き、就中支那に於ける英露の政策、勢力の消長に關して、下の如き說を爲せり……（原文を略す）……（兵庫ニウス）

「日本航海業の發達」とは之れ七月發兌の英文國民之友即ち「極東」第六號の社說にして、日本瀛船航海業の起原及び發達に關する最も信ず可くまた最も有益なる歷史的觀察なり、記者は先つ近時の日本其の文物制度思想の諸點に於て三時期を經過したるを說けり、記者の說に依れば第一時期は維新革命に續ける數年間にして、該時期間には、日本は只だ西洋文明の崇拜者、從盲者、摸擬者にして、一も二もなく西洋文明に心醉せしのみ第二時期は即ち所謂之れ取捨的時代にして、日本は審さに西洋文物の利害得失、長短優劣を比較參照し、自己の短を捨てゝ彼れの長を採るの策を講ぜり、第三時期は即ち日清戰爭以後今日の時代にして日本人は政治にまれ、軍事にまれ、商業にまれ、工業にまれ、歐洲人士の爲し得可きとは日本人士も同樣に爲し得可きを信じつゝあり、之れ所謂對等時代とも稱す可きかと之れ蓋し「極東」記者一家の私言に非らざる可しと雖も、近時日本の朝鮮臺灣に對する手腕を見れは記者の所謂對等時代云々は聊か早きに過ぐるの感無き能はず、其は兎も角も記者は、「日本航海業の發達」も、日本文明の進步と一般此の三時代を經過せるを論じ去り論じ來り、左の如き長文をせ稿り……（之れより以下原文の要點を拔粹したるものなれば之を略す）……（北支那日新）

每月一回廿日發行　一冊定價拾貳錢　壹ヶ年前金壹圓廿錢　郵税內國一冊壹錢米國貳錢歐洲四錢

發行所　東京京橋區日吉町　民友社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

德富猪一郎著

國民叢書

書名	定價	郵税
進歩乎退歩乎	十錢	二錢
人物管見	十五錢	二錢
青年と教育	十五錢	四錢
靜思餘錄	十五錢	四錢
文學斷片	十五錢	四錢
天然と人	二十錢	四錢
第二靜思餘錄	十錢	二錢
風雲漫錄	十五錢	四錢
家庭小訓	十二錢	二錢
經世小策 上卷	廿錢	四錢
經世小策 下卷	廿錢	四錢

書名	定價	郵税
第一國民小説	十五錢	四錢
第二國民小説	十五錢	六錢
第三國民小説	十五錢	四錢
第四國民小説	十五錢	四錢
第五國民小説	二十錢	四錢
第六國民小説	十五錢	四錢
第七國民小説	十五錢	四錢

新刊

第八國民小説

定價十五錢　郵税四錢

最も江湖に歡迎せらるゝ國民小説は左の六編を編纂したり

高麗陣博多聞書◎炭燒の煙◎老武者◎のろひの木◎初霞◎庖厨

一讀再繙精讀に從て興味深し

發兌元　東京々橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

再版

平田久著

露西亞帝國

定價卅五錢
郵稅六錢

攻究すべき時期に著されたる本書は、今や更らに最も攻究すべき必要を以て讀まるべくなれり。今日の形勢を看よ。露西亞を知らざる可らざるは我國民上下一般の特勢なりと知らずや。

菊池謙讓著

朝鮮王國

(九月中旬發兌)

四六版紙數
大凡八百頁

●總論●地理部●白頭山系○白頭の東系、白頭の西南系●六大江○豆滿江、洛東江、鴨綠江、大同江、漢江、錦江●中原●三面●附錄○絕東の入口、仁川、釜山、元山●社會部○社會の墮落、王室、貴族、常民、奴隸、都城、村落、佛敎、儒敎、社會情態、政治制度●歷史部○七朝史概要、古朝鮮、東方の家長國、三國分立、北人消長、高麗李朝、●近世史○大院君時代(上、下)、外戚と大院君、十七年の變、天津條約、東方の藩屛、東方二帝國、獨立扶植(上、下)、十月八日、廿八日事件、十一日の變と日露協定、東亞に於ける朝鮮、世界に於ける朝鮮。以上

東京市京橋區日吉町四番地
發兌元　民友社

渡邊修二郎著

内政外教衝突史

定價廿五錢　郵税四錢

全編三十章　畫圖七種入

外教の我國に傳來せしは、歴史上の一大事件にして、其國家に影響し、人心を感動せしと甚だ大なり。爲に時の政府は鎖國排外の政策を執り。我國民は騷亂流血の慘變を見たり。故に外交の歴史を究めんと欲せば、主として外教傳來の事跡を考へざるべからず。然るに當時の事を記するもの大抵埋沒又堙滅し、今日之を得ると難し、偶ま外人の手に成るの書ありと雖も、亦誤謬と不備を免れず（鎖國以後の事蹟は全く欠く）著者之を慨し、幾多の散佚せる記錄を採集し、或は舊家の秘書を探り、或は世に稀なる歐書を索め、多年の勞を積みて此書を完成するを得たり。其考證最も精確、從來世に知られざりし許多の事實を闡明し、讀者をして、大に興味を覺えしむ、是れ此書の一大特色にして、實に政治と宗教との關係並に日本人の特性を觀察するに於て欠ぐべからざるの要書なり。

發行所　東京日吉町　民友社

少年傳記叢書號外

吉田松陰文

定價拾五錢　郵税二錢

松陰の詩文に批評を加へて編輯したるもの則『松陰文』なり。松陰の詩文は、松陰の自叙傳なり。論策なり。寫眞なり。維新革命家の紀念碑なり。本社曩に『吉田松陰』を發兌す。而して今『松陰文』を發兌す。併せ讀む者は彼を知ること完し。

◎東京朝日評　少年傳記叢書號外として出づ、松陰の詩文を錄するに漫遊、踏海、論策、交友、村塾、家庭、最後、雜編の八項に分ち猶は松陰の略傳を附す、是等の書は大に觀感興起の功あらしむるものとす

◎早稻田文學評　少年傳記叢書の號外にして卷首に松陰の小傳を附したる、松陰の詩文集なり、漫遊、踏海、論策、交友、村塾、家庭、最後、雜編等に分かちて、詩あり、歌あり、論策あり、書牘あり、すべて憂國の文字にあらざるはなし、交友、最後等の部に收めたるもの最も味あるに似たり、志士文人の坐右に具ふるに足る

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿九年九月十日發行

家庭雜誌第八拾五號

目錄

口繪
瓶わり柴田（久保田米僊）

社說
新家計簿……一
飛魚の翼

史傳
靜御前と李香君……春波生……四
ブーア、リチヤード金言

文藝
六代君(五)……其村子……九
繼母……はなぶさ……一五
樓上待月……桐廼舍女史……二三
小川と村童
普通裁縫書

家政
目下の衛生……二六
扁桃腺炎……二六
氣管支炎……二七
下痢……二七
蝶の捕獲及保存……二八
夫婦の中

社交
袷の流行豫報……流行子……三〇

科學
馬……三二

雜錄
文がら集……俳諧堂主人……三六
千代女が教訓の發句……三九
瓶わり柴田……四二
妾の理想……某女……四三
美風ある小學校及生徒……五一

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第八拾五號

（明治廿九年九月十日發兌）

社説

新家計簿

吾人は久しき以前、本誌に於て家計豫算の説を示したることありしが、今其意により、假りに中等の家を標準として、新に理想的家計簿を製することあらは、大約下の如くなるべし。

即ち其開卷第一に掲ぐべきは一家の歳計豫算表也。

歳計豫算表

(甲)歳入……………………〇〇〇、〇〇〇

(乙)歳出
- (一)生產費……………………〇〇〇、〇〇〇
- (二)生活費
  - (イ)食費……〇〇、〇〇〇
  - (ロ)衣服費……〇〇、〇〇〇
  - (ハ)住居費……〇、〇〇〇
  - (ニ)雜費……〇、〇〇〇
  - 計＝〇〇、〇〇〇
- (三)義務費……………………〇、〇〇〇
- (四)教育費……………………〇、〇〇〇
- (五)社交及慰勞保養費
  - (イ)慶吊費……〇、〇〇〇
  - (ロ)旅行遊觀費〇、〇〇〇
  - (ハ)書籍美術品等買入費〇、〇〇〇
  - 計＝〇〇、〇〇〇
- (六)慈善費……………………〇、〇〇〇
- (七)豫備費……………………〇、〇〇〇

總計＝〇〇〇、〇〇〇

次は則ち之が豫算の内譯標準を示したるもの。

甲號歳計豫算細表

乙號歳計豫算細表

費入（畧す）

一金何十圓……………………歳出

內譯

一金何圓……………………生產費

一金何圓……………………生活費

其內

一金何圓……………………食費

但し、一人一日何錢にて、家族何人の割。

一金何圓……………………衣服費

但し、一人冬衣幾領幾圓宛、夏衣幾領幾圓宛、家族何人。

一金何圓……………………居住費

但し、家賃毎月何圓の割。

一金何圓……………………雜費

但し、薪炭油毎月何程、筆墨紙毎月何程の割。

一金何圓……………………義務費

其內

一金何圓……………………所得稅其他

一金何圓……………………教會費

但し、毎月何程の割。

一金何圓……………………教育費

其內

一金何圓……………………甲男在學費

但し授業料寄宿費等毎月何程の割。

一金何圓……………………乙女學費積立

但し毎月何程積立。

一金何圓……………………社交及慰勞修養費

其内

一金何圓……………………慶弔費

一金何圓……………………旅行遊觀費

一金何圓……………………書籍等買入費

一金何圓……………………慈善費

一金何圓……………………豫備費

右の如き躰裁にて成るべく之を詳記するを要す。而して其内生産費は、家長の主任とする所にして、別に細密なる帳簿あるべきを以て、家事經濟の主任者即ち主婦の管理すべき家計簿には、唯其大略を錄するのみにして足りなん。

斯く豫算二表巻首に掲げ、帳簿記入の際屢之を繙閲することあらば、常に家計の大方針を記憶に存ずるを得、少なからず冗費を省き得べきと共に、更に之を月に配當して月計豫算表を製し而して之を帳簿の毎月首に掲げ置かん乎、其効一層大なるものあるべし。

月計豫算表は、こゝに其躰裁を示すまでもなく、歳計を月に配當して則ち足る。唯衣服費其他、月によりて記入すべき月と記入するに及ばざる月との異りあるのみ。

且つ以上の豫算表は成るべく之を色紙にし、一見して之を見出し得べからしむるを便とす。

次は則ち日々に記入すべき所にして、乃ち普通の家庭簿記風にて不可なし。例之ば

年 月	日	摘要	円	日計 円

即ち日々の支出を一々に記入し、其日の最終記入に至り、合算して之を日計の欄内に轉錄し置く也。以て月計を算するに便す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

或は他の躰裁により、各費目を別ちて記入する如きことあらば、其便利更に大なるべしと雖、煩はしければ今記さず。

次は則ち毎月末に於ける決算表也。其項目月豫算と同じく、毎月の支出を食費とか衣服費とか或は社交費とか修養費とかに別ちて記し、一目して月計豫算と對照するを得べからしむべし。庶くは以て豫算超過の支出をなす如きことなからしむべきを得ん歟。

此くの如くにして一年の家計簿を製せん乎、最後に至り、更に一家歳末の決算表を附するを要す。其項目一に歳計豫算に從ひ、月末の決算を合計して轉記すべし。蓋し歳計豫算に對照せんが爲め也。(家庭雜誌第六號參照)

飛魚と翼

飛魚といふは珍らしき魚にて、鰭の外に翼を持ち、入ては水中に游び、出ては空中に飛ぶ、此の魚初めは鰭のみなりければ、水より外に生活に場所なきを遺憾とし、若し余にして鳥の如く翼を有さば、高く海上に飛んで鯨の襲來を逃るゝを得可ければ、總ての他の魚類恐るゝに足らず、且又水陸兼行の快樂を得られんものと思ひ、何卒我に一双の翼を與へ玉へと、竊かに龍神に向て、我儘なる祈願をかけけるに、忽にして麗はしき兩翼彼の脊に生へ出てたり、今は全く彼の希望の如く、海面を離れて自由に飛翔するを得ければ、飛魚は偏に龍神の靈驗なりと喜び、友なる魚に誇り顏、これ見よがしと縱横無盡に飛び廻りぬ。

彼はかくて、恰かも一生面を開きしかの如く、新なる翼の力を弄び、空中に餘念なく戯れつゝある折しも、不圖大なる鷲の後方より此方に飛び來るを見たりければ、彼は周章狼狽辛うじて、海中に潛り込めり、これにより恐るべき鷲を避くるは、鯨の口を逃るゝよりも、甚だ危險にして困難なることと悟りければ、前の日祈りたるの非を悔ひ、再び龍神を拜し、賜はりし翼は返上仕るべければ、何卒以前の我となし玉はれと祈願せり、龍神は之を聞き、カラ／＼と笑ひ玉ひ、其は汝の我儘なり、自業自得とあきらむべし、我慾私欲のために、貰ひ得たる翼が、却りて汝を苦しむる器となるの愚かさよ、と嘲れつけられたりとなん。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

史談

静御前と李香君

春波生

『なれて吹く、名殘やおしき青柳の、手折りし枝を慕ふ春風』是れはこれ、楊巨源（唐代の詩人なり）が楊柳の詩を、御國風にうつしたる室鳩巢か名吟なり、再讀三讀いよ〳〵其意の深きを覺へ、津々たる情愛ます〳〵溢れ來るの心地す、楊柳のすでに人に折られたればとて、春風のそを餘處にして吹ゆきなば如何になさけのなかるべきと、尚其たをれる手を去りやらで、名殘惜し氣にそよ〳〵と後追がはに吹き來るこそ、誠に〳〵有情の極、やさしさの絶頂なりといふべけれ、朝には薩に與みし、夕には長に媚び、一に其榮枯と盛衰の如何によりて、交りを換へ友を捨て、へつらふ處は是を主ともわがめそやし、捨てたる處は奴よりもまして是をうとんじ、唯々已賢面に大道を濶歩する今の世の輕薄者流、是を讀んで如何の感ある。

黄金のある處妻あり友あり、黄金のなき處親なし子なし、利を見ては其さとき事蛇の如く、情に於ては其にぶきこと豚の如く、味わひもなく旨味もなく、所謂乾燥砂の如き、文明とやらいふ今の代に於て、情味津々溢るゝ如く、和かにして且暖かなる一陣の春風、そよ〳〵として手折りし枝にも後追がはに慕ひ來るもの、我等何處にかそれ求むべき、赤貧の身は到底能はぬ望なり、寧ろ古の偉人列女が傳をたどり、せめては人の身の上を我身の上の事にかりなし、暫しだも心を慰め樂まんに若かず。

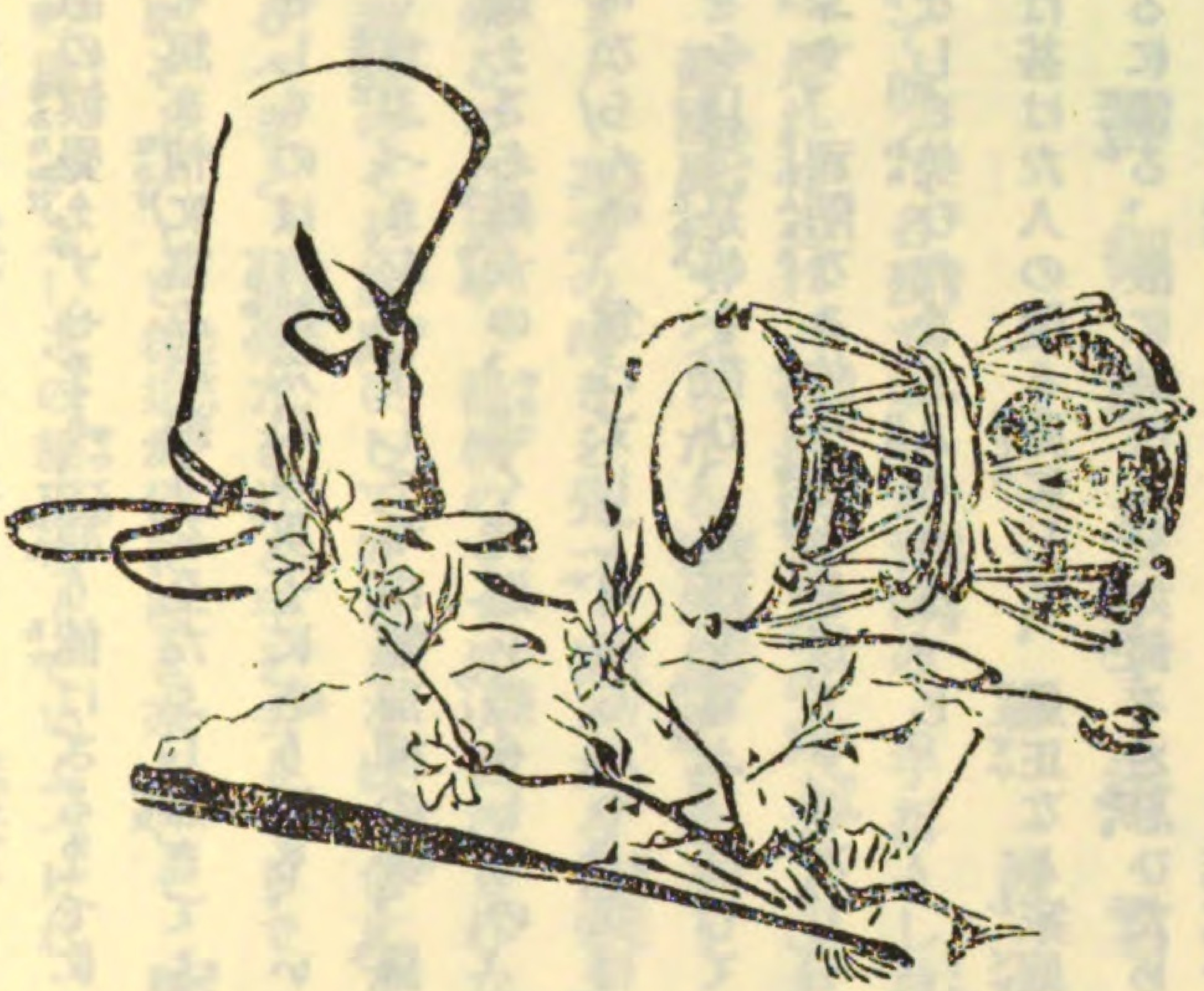
避暑山村に閑居して、緑蔭に亂讀せる和漢の史傳、積んで殆んど數十卷、其内に於て尤も心を得たるものぞも數多くして指も足らず、實にや有情の人昔は少なか

らざりしなり、一諾死を輕んせし我國の武士、貧居食を別つ漢土の學生、其情交の深密なる語らんと欲するも感激の涙覺えずせまり、語り能はざるまでに及ぶ、斯くも篤き情に富み、終りを全たふし難きてふ、友道を盡せしものは有髯六尺の男子にありても、いとゞ敬ふべく尊ぶべきを、ましてや巾幗蒲柳の身、羅衣輕裳にも堪えさる婦女の、よく其道を盡せしもの、敬はずして可ならんや、尊はずして可ならんや、我は滿身のまことを以て是等を敬ひ、是等を尊ぶ、然して其敬ふや尊ぶや、頑陋なる杓子定木を以てするなし、さぞなよしなしと笑ひたまふ人もあるべし。

妓女は甚はた人の賤る處にして、嚴正なる家庭或は是を語るに憚る、故に余はこを如何ぞと思ひためらひ再三筆を採るに迷へり、されども却て思ふ其賤むべきは近來の妓女にして、古來必ずしも然るにあらず、さればこそ姫鏡にも多くの妓女の傳をのせたり、加之ならず今の代の人々も或は歌に咏じ詩に作り、是を傳ふやいと多し、何事かあらんとて、茲に勇を皷して筆を採り、和漢の妓女、其傳甚た似たるもの二人を駢せ語らんとす、手折りし枝をゑたふ春風、是等に於て見るを得べきか。

扨其二人の妓女とは誰ぞ、表題すでに是を告く、靜御前と李香君なり、此二人程事のよくも似通ひたるもの或は外にあらざるべし、其生ひ立ちの順序といひ、其心の雄々しさといひ、誠に〱能く相似たり、花の如き其容色、松の如き其貞操、余は余の文の艶に乏しく、充分に是等を傳ふる能はさるを耻づ。

靜は京の都の白拍子磯の禪尼が娘にして（磯禪尼は平家琵琶の名人なり、北面の武士何某とやらんとふかく語らひ、靜を生む、やゝ文字をも解し少しは歌をもよみしといふ）李香君は洛陽（支那の都）の歌妓李貞麗か養女なり、ともに男魂なる妓女を母として狹斜の巷に



人となる《禪尼は性質温和にして一見與みし易きか如しといへども、其人を恐れざることさる堂上方の前に於て意地を立てぬきし事にて知るべし、又貞麗が豪俠の氣に富めりし事は曼翁が板橋雜記に委しく語れり、《事長ければ玆には略す》穎才いづれも人に勝れ、これは十二にして男舞に堪能の聞へ高く、其名は遠くはこやの山の奥まで達し、かれは十三にして琵琶の秘曲に熟達し、盛名四方に鳴り渡る、《周如松といへる人について是を學び、玉茗堂の四夢などいふていづれも我國の琴の組ともいふべき程のいとむづかしき曲に名妙を得たりしとぞ》誠に好一對の才女なり、其十六の春義經に見へたりしは、十七の秋侯朝宗《方侯域といふ青年、東林黨の名士なり、甚た文字に達す、全集を壯海堂文集といふ、我國にも夙に飜刻せられたり、其他虞初新志等の書にも此人の文甚た多し、就中香君の傳、馬伶の傳など、殊に名高し》に逢ひしに似て、所夫とあほぎ仕ふる所兩者殆んど同一轍、其鎌倉殿に悪まれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て六十餘州一身を容るゝ處に苦しみしは、奸臣元尤鋮がために世をせばめられ、去りて北方にさまよひしに等し、雪中吉野の里に伴なひ、深夜堀河の御所に侍せしは、其化粧部屋にとぢこもり、筺の扇に積る思ひ慰めしに、行方こそは異なるも心は共に一つなり、鎌倉の御所において梶原平次を辱かしめ、汝奴輩豫州殿にしてましまさば、我が顏をたに見ることと叶はさるの身を以て、如何ぞ斯くも無禮なると罵り散らせし爽快さは我等史を讀むもの〻實に溜飮を下すの一節、代官田仰なるもの〻元尤鋮が使者に來り、黄金を以て其心を得んとせしも、一言の下に拂ひ退け、美を盡したる贈物を、盡く階下に投げ捨て、妾はいかにしても〳〵侯公子(朝宗)にはそむき得ず、汝無用の人こそは疾く〳〵玆を去らずやと柳眉逆立て叫ひし氣味よさ、案を叩いてよろこぶ處、丈夫も及ばぬ事どもなり、先きつ頃すでに仰の是ありしをいなみまつりたりけるも、今は早貴命再三に及びければ止むを得ず、文治元年三月某の日、八幡宮の社前にて靜は舞の曲をなす、梶原工藤畠山なんどいふ歷々の面々笛に太皷に銅拍子に、各樂の役をなす、源二位は臺御所政子の方公達頼家公をも伴なひたまひ、正面に簾をたれて御覽ある、草木も靡く鎌倉山殊には君の御前に於て必すや關東の萬歲を唱へ、時流一般の人の如く、へつらふべしぞと思ひの外、靜は優しき聲あげて『しづやしづ賤の小田卷くりかへし、むかしを今になすよしもかな』とうたひしかば、人々ハット思ひしに猶ひきつゞけ『吉野山、峯の白雪ふみわけて、入りにし人のあとぞ戀しき』と萬人群衆の裡において、其さきつ夜の情を慕ひ、路次になやめる所天を思ひ、ちつとも恐れひるまざる、まさに是酷々たる雪に押されて、色衰へず、嚴寒凜として立てる千年の松の操にもたとへつべし、侯朝宗に別れてはたれこめて一歩も出てず、奸臣大鋮の如何にもして

己がながめになさんずものと、それは〳〵百方手をかへ品をかへ、誘ふと雖とも頑として動かず、遂には多くのつはものどもをかりあつめ、暴力を以てひきい去らんとせまり來る、香君今はこれまでなりと、心を決して聲鋭く、汝奸臣我が侯公子を困しめ置き、これにていまだ足らずとして、猶々我をさへも困むかや、千曳の岩はよしや動かし得るとても、我が心如何で動かす事のなるべき、一身は皆侯公子に捧げしもの、死を以て侯公子のためにこれを守ると叫ながら立上り、側への柱に我とわが其美しきかんばせを打つけたりしかば何條以てたまるべき、紅の血潮サト迸ばしるを篋の扇の表にうけとめ、あはれ時わりて侯公子茲に歸り來たまひなば、是を篋と御覽ぜよと、せまれる敵をものともせざりし、鐵の如き心の雄々しさ遂に如何ともするによしなく、執念ふかき奸臣も漸く思ひあきらめたり《其後或人其扇面に殘れる痕を花となし、墨にて枝葉を添へ、一朶の桃花を畫きなせり、是有名なる李香君の桃花扇なり》

ともに是一介の妓女、所謂川竹の流れの身にして貞操義烈かくの如き、正に六尺の男子にも勝る、吉野山の一首こそ義經の傳に一種の光彩を增し、一柄の桃花扇は侯朝宗が名を重からしむ、好一對の好談柄極簡短に茲に錄す、手折りし枝をもまたふ春風のいと〳〵優しき情、兩者に於て是を見る《靜の事蹟は種々の戯曲に仕組まれて兒童走卒も是を知れり、香君の傳は孔雲亭が筆により、桃花扇傳奇となりて常に彼の地の劇場にのぼる》

汝若し金錢の價値を知らんと欲せば、試みに往きて人に借れ、何となれば、借る者は悲を招く者なればなり、債を負ふさき、如何に成行くべきかを思考せよ、即ち己れの自由を人に奪はるゝものにして、若し返濟期限來るも返すこと能はざるさきは、債主に逢ふを耻づべく、之を語るさきは、之を恐るべく、其都

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

度憫むべき卑屈なる言譯を爲すのみか、漸く實直なる心を失ひ、賤むべき、辻褄の合はざる虛言をつくに至らん、何となれば、負債は惡事の第一にして、虛言は其の第二なればなり、虛言は負債の背に乘るものなればなり、抑自由の人は、何人たりとも、之を見、若くは之と語るを耻ぢ恐るゝ等の事あるべからず、然るに貧困は凡ての氣力と善德を奪ふものにして、例へば猶空瓶の直立し難きが如きなり。（プーア、リチヤアド金言中の一節）

文藝

六代君《五》

其村子

我鎌倉に下向して源二位公にあひ奉れば、是程の事は何の手間暇、僅かに二日三日を費し、必ず〳〵とゝなふべし、大地を打たん小槌こそよしやはづることあり とも、このこと相違あるべからずと、さしもに賴母敷のたまひつる上人を、疑ふとにはあらざれども、流石平家嫡流の若君、いかで〳〵たやすくは赦免あるべき、或は六づかしかるべしと番卒どもの問はず語り、聞くともなしに聞く齋藤の兄弟は、今更心も心ならず、ひたすらに嬉しき赦免の狀を得玉ひ、はや〳〵歸洛あらんことのみ、祈りに祈り、願ひに願ひ、今日と送りては明日とむかへ、日數やう〳〵積るにつれて、北嵯峨よりの使はいよ〳〵繁けく、いまだしや〳〵と、問はるゝに否と答ふる身のつらく、きゝ傳へたまふ母の君の御心は叉さながらに碎けんばかり、夜叉御前をはじめ端女どもまでひたなきに泣くなんど、實にや悲しきことの極みなりけり、やるせなき思ひを訴へ奉るは日頃よりさしもに深く賴みまいらせつる、長谷寺の觀音薩陀、大悲の本願更にあやまちたまはずは何卒〳〵今一度、六代を生きて返させたまはれかし、凡そ人の子は里にやり他につかはして餘の人手にて養ひ育て、月に一度或は二度、稀れにあひみるものだにも、恩愛の

情はいとゞあるものを、ましてやこれは生れ出にし其日より、可愛さのあまり片時もあたりを離さず、妹の夜叉と諸共に、たとへば、左右の手の如く、こゝらの年まで育てあげにしものなれば、誠に人の持たさるものをもちたる如く、きづなは日と共につよくなりゆき、鎖のくさりよりも強く、なさけの色は時と共に濃くなりまさりて一入再入の紅よりも濃く、又南海の水より深し、春の花秋の月にもいやまさり、千顆萬顆の珠にもこして、唯にこれ等をいとゞしく思ひ、其成長しなんことのみを、我身の老ひ行かんをも忘れはてゝこれを望み、やがて人となりてうれしくも徐目の沙汰に預かり、元服加冠して何の輔何の少將なんといはれん日は、如何に大人びて見えけんぞや、夜叉もさる頃にはいと頼母しき人を撰ひてまみへさせ、左右にならべて見る時はこれに上こす樂しみのいかであるべきと、小夜のねさめにも此事ばかり語らひて、世にも樂しく思ひしものを、思ひきやな思はじやな、壽永の秋の風いとあらく、一門の榮華玆にちりそめ、古き祖先のむかしより、一日とても離れし事なき、都の住居も遂には心にまかせずして、聖天子をはじめまいらせ、各々縉紳束帶の扮裝にことかへ、こはらしき鎧の袖をそよふく朝の風にふかせ、むかしこそは歌枕さては又物の本にのみ其名を聞きし、西の國へ旅立ませしかば、やがてわが三位中將殿もいかで人々に後るべきぞと、心つよくも出立たまふたもとにすがり、扨は小夜の寢覺の睦言は、今更にそら言にてありしかや、我身をはじめ幼き者ども如何になれとてふり捨てたまふぞ、何條離れまいらすべき、たとへば猪ふす野の末までも、いさな住てふ荒海のはてまでも、必ず從ひまいらすべしと、泣きくどき〳〵、命にかけすがりしを心強くもふりきりて立出たまひし其時に、やがて世の定りなば必ずむかへまいらすべしと、のたまひ殘したまひしを心

たのみに憂年月、木にも草にも心を置き、人に恐れ世に忍び、まつとしもなき我君よりむかひの人の來らんを、待ち明し又待暮す、其心苦しさ其いぶせさ、まつ甲斐ありて舍人竹里、君の文もて來りしことは來りしも、これはたうれしきたよりにあらず、されば彼の時こそ永き別れの時にてありしと思ふにいとゞ、かなしきも僅かに二人の幼きものにまきれ／＼て疾くにも死すべかりける、はかなの命をつなぎとゞめ來りしなり、殊にかの六代こそよく／＼面影の三位殿に似合ひて、其大人びてゆくに從ひ、いよ／＼ます／＼其の如くなるにつけてもなつかしく、君とかしづき子と愛し、萬つ心を慰めしに、今しも打たれ候ひなば、それこそは我玉の緒も共に絶へなん、願ふは御助あれかしと、床にかけたる如意輪の畵像にむかひ、合掌禮拜更に餘念もましまさず、眞心こめて祈りたまふ有樣こそ殊勝にも亦憐れなり、實にや天人の五衰人間の世にもあるなりけり、さしもに賢明のきこへ高く禁裡仙洞にもいと／＼重んじられたまひつる小松重盛卿の御子、平家の嫡流と世にも時めく維盛の卿にとつぎたまひし其日には一門の人々をはじめ誰しかこれをうらやまざりしぞ、さればみづからも亦世にためしなきまでにふかくも喜ひたまひしものを、家運のこゝに傾きてかゝる憂目を見たまふ事いたはしなんども愚かなり。

折からに息せきゝりて齋藤兄弟、隱れ家に馳せ來りしかば、母君はじめ夜叉御前端女までも打揃ふていとはし近くまかでたまひ、いかにぞや／＼、上人御歸洛ありしかや、六代は赦されてやがて歸り來るかや、今は何の用ありてかくも急き來りしぞ、樣子こそ疾く／＼きかまほしけれと、問ひたまふといへども兄弟はうつぶきしまゝ何もいはず、唯々涙にむせぶのみ、さてはいよ／＼氣づかはし、六代は早斬られたりや如何にぞと、たゞみかけてのたまふとき、漸々にして涙を拂ひ、

いまださる事とても候はず、さては何故にかくはなくぞや、さればなり今日しも北條殿我等兩人を側近くまねきよせ、そも上人と二十日の日をきり御命助け置きつるに、其日限は今日にて盡きたり、されどもいまだ上人はかへりたまはず、思ふに鎌倉殿の御赦免更になきなるべし、さらんには何時までも何時までもそを待つべきにあらざるなり、今日しもかへりたまはずは時政こそ明日は早天に出立すべし、されば六代君御いたはしくは候らへども君の嚴命いかんともするに由なし、されども若しや途中にて上人に逢はんこともはかるべからず、さあらんには後悔更に及ぶことなし、されば首にせで誘ひ申候べし、誘ひ申すといへども足柄山を越へてはいかにも叶ふべからず、足柄山よりこなたにてもし上人に逢ひ奉れば必ず引渡し候べし、もしそれまでに逢ひ奉らずば、如何にも拙き御運とあきらめ、ゆめ北條をも又鎌倉殿をもうらむべからず、御身等は日頃御そばをはなれさりし人々、御ともして其御先途をも見屆んとの心あらば、從ふて東へ下りなんこと更に〱苦しからず、志あれば急ぎ用意をなすべし、明朝は鷄鳴の時を期して出立すべし、時刻後れて叶ふまじと事こまやかに傳へたり、いざ明日こそは下向ぞと六波羅の上下は急に時めき、各々喜びの色を顯はせしも、これがため俄かに憂のまさりしは我々どもにて候なり、今更何とすとも詮なし、唯々北條殿の許を得て、いづくまでも從ひまいり、御先途見屆まいらすべし、此事まふしあげんため、まかり歸りて候と、いふを一々聞終りて一同は今更に身も解けんばかりに悲しく、天に叫び地に哭し、唯いかにもして助けよやと、母君の狂したらんがごとくのたまへども、如何ともするによしなし、時移りては更に詮なし、さらば是にてまかるべし、明日は早朝鷄鳴の時としいへば、志か思ほし召たまふべしと、しほ〱として齋藤兄弟、又六

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

波羅へかへり行きけり。

前生の結縁よければこそ、今世に於てさしもに時めく、平家嫡流の公達と生ひたまひし果報はあるも、時其時にあらずして、かゝる御身となりたまふ六代君こそ、いとほしけれ、むくつけき東夷の兵ともに前後左右を圍まれて、戀しき母君の住みたまふなる、都の空をあとにして知らぬ國、關のあなたへむかひたまふ、御心の中如何にやありけん、齋藤五六兄弟は悲しさにつや／＼水をも咽にいれず、涙と共に牢輿のかたへにつき添ひ下り行く、其途すがらゆくてより急き來る人を見れば彼こそは上人の御使にてはあらざるやと、よしなき事に心をいらち、或武士らしき人を見れば、扨は疾く／＼途中にてなきものになすべしと、鎌倉殿の使ならずやなど、思を焦し、行き／＼て茲は駿河路や千本の松原にまで來りし時、北條は兄弟にむかひ、こゝまでは若しや／＼と上人に逢はんとを心にあらまし、其まゝにして來りしも、最早これよりさきへは叶はず、鎌倉殿のきこへもあれば、都に於ておこと等にまふし傳へたりしが如く、茲にて御打奉るべしといひきこへ、又一同にも此由かくと告げたりければ、情けを知らぬものどもの急き敷革なんどの用意をなすも悪々し、兄弟の內兄なる五こそ北條に打むかひ、此上は如何ともすべき樣なしたとひ茲にて若君打たれたまふとも、此皆御運の拙なき處と、何條鎌倉殿をも御身をも御恨まふす事のあるべき、日頃の御心くはりこそ却て御禮申上べし、さるにても若君の今はに於てかく申す齋藤五こそ重き願ひの外なり、最期の御奉公何卒太刀取の役目我等に仰せつけられたしと、涙と共に願ひければ、北條もさこそと是を許してけり、やがて萬端の用意とゝなひ、此由かくと通しければ、露も恐れたまふ色なくまづ／＼として、敷革の上に坐し、優しき御聲にて念佛三返唱へたまふ、齋藤五は兩手をついて恭

々しく、最期の御奉公我こそ北條殿の許によりて、御太刀取を勤むべし、今はに於て何なりとも申のこしたまはん事あれば今こそ一々のたまふべしといひければ、六代君扨は汝こそ太刀取を勤むるとかやござんなれ、今はに於ていひ置かんこと更になし、唯々汝都にかへるも必ずともに六代こそ途中にて斬られたりといふことなかれ、遂には知らるゝことなりともかくさん程はかくしたけれ、この事よく〳〵心せよ、さるにても主從は二世三世此世の緣はよしやこれにて絶ゆるとも未來で忠義をつくして呉れ、北條殿の待わびたまはんも心元なし、疾く〳〵斬れとのたまひつゝ、世に美しき御手にて後れ毛をかきあげたまふを見まゐらすにも、いよ〳〵かなしさの胸にせまり、扨何處より太刀のあてらるべきぞやと、兎つおいつに時を移し、今は早如何ともするによしなく、是までなりと心を鬼にし、若君御免と太刀振りあげ、すでにかくよと見へにし時しも、遙かむかふに聲高くしばし〳〵と呼はりつゝ馬

蹄に巷の埃まきあげ、馳せつけ來る荒法師、墨の衣に檜笠、近づくまゝによく見ればまさしも文覺上人なり、ひらりと鞍より飛おりつゝ、一禮漸くすむやすまず、六代君が赦免の狀天も響けと讀上けゝり、北條はじめ並居る一同、齋藤兄弟はいふも愚、喜ひの聲鬨の聲、北條殿は鎌倉へ、文覺上人は六代君を我が乘り來りし馬にのせ自から、轡づらを取り、都の方へ返りけり

《完》

繼母

はなふさ稿

妾今老て目も何時しか朦朧となり、耳も次第に覺束なくなりぬ、剰へ宿痾頓に加わりて、只さへ軟弱の身は四肢の不自由になりまさりて、唯だ餘命の幾くもなきを知るのみ、昔は女に不相應しきと誹られし健氣も、茫として消へ果て、譬ばさしも强かりし繩の綯りの戻りたらんが如くなり。夫に付ても若き時の頑固一轍にて、爲さで濟む苦勞ども、已より求めて爲したるを、回顧するにつれ、吾ながら嗚呼愚ましかりしと悟る計りなり、來で來歷を摘みて昔者の如何に馬鹿正直なりしやを示さん。

妾十八にして嫁ぎしも、緣薄くして、姑の鬼々しきに堪へで、二十の時は百年もと期したる夫の家を見棄たり、夫の家を去りてより、嫁入は有繫に恐ろしきものと思ひ、寧そ獨立して一家を建てばやと、大膽にも決心したり、斯く定めては中々に、勿躰なや嚴父慈母の訓をもいかなことと、果ては諸方より望みの懸るか五月蠅く、自家に居ればこそと、人を頼みて去る大名の御屋敷に勤たり、御膳部より御姫樣の御傳まで經上り、二十五の歳は一廉の貯蓄も出來、誇る計りの衣裝持とは成りぬ。或る日知りべなる人、淳々と妾の無分別なるを戒めて、女は到底獨り立つべからず、松に纏む蔦と

も申し、杖とも信む男子の力に據る箸のもの、老て親身の子なきほど、憂きつらきはなきぞと、しみ〴〵身に徹へたれど、固より負けおしみなれば、初縁に失策りたるは、姑の嚴しさに堪へで出戻りたりなど、善悪なき明瞭に誇らゝるが悔しければ、御親切は重ゝ忝なけれど、思ふ子細あれば、世にも珍らしき嚴格なる家なれば、行きて我身の恥も雪く可けれど、なま大底の處にては、御斷り申さんと、據儀なく云へば。其人さればなり、御身の氣性を知りての世話、惡くは謀らふまじ、先方も御身を知りての所望と云ひ、其家風と云つば名ある嚴しき家にて、舅は歴々の武士、先妻の娘も有れど、良人は名ある儒者なれば、御身の爲には至極の處なり、元より擇たる位なれば御身ならでは適ふまじ、行き給へと。勸められ其より思考するに付け、實に女は日影の身、男子を援けてこそ、家の爲にも國の爲にもなるべけれ、望む時に售らざれば、老て臍を噛まん、左なりと其慫に從いける。

妾再度の縁家は、兩親あり娘二人あり、扶持も可なり有りて、稍や富饒の家なりしも、小藩の習として、少しの内職をも爲したりけり。再縁まて第一に感したるは繼母の身なり、古來繼母の不義理にて、己か子をば愛で、先妻の子を酷待したる試めし多くて、中々に僻事と思ひたり、妾今幸い二人の繼子を持てり、いで古人の辱を雪がん姉は十五にして松と呼ひ、妹は十にして菊と呼ぶ、廿五にして十五の子、僅か十歳の差は姉と云こそ似合しけれ、十五の子を育つるは四十にして尚難し、況て繼母の身に在りては容易には行かじ、此に於て經路の困難なるを悟りぬ。由來舅は嚴しきものなれど、此家の舅は中々類まれなりき、姑は人の良き換りに、往々分別なきと共云い出て、舅の怒を起しては、妾迄易からぬ重荷を負いき、さはれ舅は好く道理を辨へたる人にて、爲したる丈は目の付く人なりし

是のみは妾の力なりき。良人は少きより學びの道に志し厚く、親に密しての螢雪の苦、初手は武士に要なしと、呵り玉ひし舅も、我が折れ惡しき嗜みならねばと、其が爲すまゝに爲去玉ひしに、遂に名儒の門に遊び、切瑳の功は空しからず、今は天晴其身も儒者とは就り玉いぬ。常住漢籍を手放さず、晝夜弟子の訓陶に怠らず、又生れ付ての君子にて妾數十年册く中、つい怒り玉ひし面を見ざりき。常に陰德を喜び、功を人に讓り玉ひしかば、學者とは左るものかなと、人皆讃めさるはなかりき、維新の初、藩校の講師なりしも、人の妬みに遇い、飄然席を讓りて自宅に籠り、弟子大に進みたり。妾此の人こそ世に賴む人なれと、遂に此處を死場とは定めたり。

斯くて過す內、一難事こそ起りたれ、夫は妾の懷胎にてありき、固より嫁きたる身、此は覺悟の前なりしも、妾は遂に繼母にてありき、妾初より子とては二人の娘より外に無く、二人の中、一人に此の家を次がせ、其れに據るこそ當然と信じたりき、左れは今后幾人、己れ子を產むとも、そは出でゝ他人の家を次くべきものと定めたり、世の繼母の、己が子を立て家を繼かせんとの邪見は、妾深く忌みたれは、產月も迫り歸家するに先だち、舅に語りて斯く曰ひぬ、妾男子を上けで世の疑を受けんより、女こそ望ましけれ、若し怪我に男子を產みたりとて、必ず案じ玉ふな、義理は辨へ候へばと、歸るに望むて舅の勸を幸ひ、せめて心の符にと、男子の用意するが世の習なるに、妾獨り女子の衣裳をぞ調へける、こは男子にても女子の途を踏ません爲なりし、程なく產み落せしは、玉の如き男子なりし母君父君の喜び玉ふに、妾獨り胸痛めたり。

七夜去ち、一月經ちて、本家に歸りしに、重村の叔母なる人、來玉ひて、嬰子を抱き此は好き子なり、何と名けしや、「正」なるとや好き名なり、必ず正しき道を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

踏みはずゝまいぞ。如斯好き男子ある上は、二人の姉も早や用はなし、何處にても嫁くが善し、御身は僥倖ものなり、繼母も多きに根次を產むは、妙利もの、夫にしても二人の姉こそ不幸者と、最も苦々敷ぞ申されける。聞く妾は悲しさ悔しさ、抓み懸らん計りなりしも漸く押へて、さればなり假令男子の五人擧げたりとて、後妻の子は後次くべきに候はず、妾が子として據るべきは、只松あるのみ、已に父上にも談合し置きたれば、必ず御心配遊ばすなと、聞て叔母は只行きつまつてぞ見えにける。

正は健かに長立ち、眞丸に肥り、漸く笑ひ次第に匍ひ、立ち歩く樣になりぬ、舅は男子の初孫に、氣も奪はれて、愛しがり、始終座元を離さゞりき。菊は未だ十一なれどいぢものにて、一度敎へたるは決して忘れず、姉は十六なるも只遊ぶと白粉裝ると紅含む事にのみ身入り、妾手取らぬ計りの躾け、嚴しければ邪見と誹られ、緩なれば人の子にて關まはずと謗られ、妾人知れず苦心したり。又舅の口好なるに、米の多く舂きたるは久くして臭氣を帶びて喰悪し、夏なとは毎日の費用丈け、精くものぞと云ふに下婢は有れどさは酷く使われぬものから妾意地にもなり、自ら毎朝未明に起き出て、其日々々の費米を舂き、人の寤める比には何時も濟して居たりしも、習はぬ業なれば、手杵持つ手に幾度か袖しぼりぬ。加之過活もありたれば家事片手、夜更る迄の營み腰も腕も拔け去る計りなりし、されば用多きとて、正を竹籠斗升などに容れ傅半分に洗濯したるも多かりし。

兼て松に家を繼がするは妾の願なりしかば、片時も速く埒明て心の程を世に知らせんと、舅のはやしと止むるをも聞かで、然るべき婿を貰い受けたり、間には男子を持ちながら、其人も未だ達者なるに、養子ざたの狠狽者と、笑ふ人もありつらん、然し妾の解したる繼

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

母の義理は斯くにてありし。
隙行く駒の日脚は速く、正は四歳とはなりぬ。紐解の祝に氏神詣では身上を限り、着飾らせるが常なりしも、繼母の子は左る贅澤は云われぬものと、妾獨り呑み込みて、極めて目立たぬ様、質素を主とし、羽織も納紋の付たる計り、衣裳より帶に至る迄、木綿にて取合はせ、脇差も良人の差添を仕服して、形ばかりの打立に、玩是なき子は初陣にでも立つ如く、保嫗に連れられ、いそ〳〵と出で行くを、見送る親の胸は入創する思い。親と呼び子となるは生ある習い、禽獸にても子は可愛きに、世の學理と人の愼は争はれぬものなり、せめて舅の在まさばと思ひぬ、
其年も暮れ、正は五歳の腕白に、チンガラ（木の尺許りなるを突りて地に打込みて勝負するもの）を作らんと、嚴閾の敷居を臺に、庖丁もて樫の木を突り居たり。松は見付て目を瞋り、其處は嚴閾なるぞ、毀ちては見悪しと、庖丁取て振上んとするに、正は中〻に離さず、兼て小耳に挾みたるともあり、まけぬ氣になり、左なり嚴閾にまれ、床にまれ、我が家ならねば知らぬことと、互にせり合ふを側に見る親は可笑しくも又悲し。」
「まつ」も婿を向へて程なく又男子を擧げたり、敏雄と名く、生れて兩足内に彎曲し、捨て置かば不具者となるに、妾引取り介抱し、偶ま四里隔たりて骨繼の名醫ありければ、七夜經つか經たぬに、嬰兒を懷いて療治を乞ひ、初めは肩輿にて左程とも思はざりしも、三日越しの通い詰め、長の間の費用も少なからねば、后には下婢一人づれ子を抱いての徒歩き、折節夏の最中にて、熬り付る炎天に、流るゝ汗は泉を爲せど、女の足に八里の路日歸りなれば、息ふ間さへろく〳〵に無くて、干し通しなれば、さしも雪と譽められし、妾も眞黑の黑奴にさもにたり。今より思へば幸くも病まざりしと怪むのみ。醫師も期を違へぬ氣魂になど〳〵感じ入り、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一入力を込めしかば、三月許りに早や常人の姿とはなりぬ。されば其時の恩に感じてや、此程の病にも敏雄は始終側に侍りて、實の子に優る介抱は只殊勝とこそ申すべけれ。

敏雄の介抱の終りて一月計り、姿「きく」は亦しき眼病發して、初めは差しとも思はざりしに次第に重り、風眼とやら遂に明を失ひ兼まじき重病に、妾かにかくと看病すれど、更に効なく、土地の醫師も匙を棄てゝは力なく、斯る時の神佛様とて生目八幡に願を込め、可惜黒髪を斷て捧けたり。偶ま二十里の彼方に神通の眼科醫ありと、人の知せに取るものも取り合へず、馳付け晝夜抱きかゝへて介抱に、夜の目を眠る間もなくて、一月二月と經ぬれとも其甲斐とてはなくばかり、天運盡きたるか、遂に生も付かぬ不具とはなりぬ、妾此時の失望は如何計りぞや、斯る心盡しも水の泡、神も佛も無き世かと歎くより外に謀はなし。其後數年過ぎ「きく」は目の見へぬか元となり、身まかりぬ、病付て危篤なるに、姉は却て面倒とて寄付かず、賴むは母上のみと最後迄も傍を分たず、先年眼病の時の事とも言出ては、決して忘れは致しませぬ、何時か御恩報しと思いしも、到底も此度は望みなく、逆さまながら、先立ちますと、よゝとばかり泣入るに、勵ましては氣を强めいたわり如才なかりしも。定まる業は是非もなく妾に縋りたるまゝ息絶へたり。

去るほどに敏雄も追ゝ生長て、四歳の時の祝には、妾此時こそと思ひたれは、身上の有らん限りを盡して、正の時とは雲泥の差にて、七子の羽織り、糸織の袷、博多のキュー〳〵云ふ程の帶に、袴も仙臺の極上を撰び腰の者も新調させ、氏神詣でよ、親類知巳への禮巡り、あたり眩ばゆく出立たせけるは、心地好き次第なり。仰山なりと思ひたる人も有るべけれど此は妾の意地なりし、斯くても「まつ」は不足かちにて、我子計りに煩

腦懸け、菓子菓物も私に與へ、金さへ隱して取らせしは、淺猿しかりける次第なり。或る時正が物欲しとて只管乞ふて轍まきりしも、敏雄の居ぬに辛抱せよと、叱りて與へずありけるに。何時しか敏雄は遊より歸り、泣入る正を打見やり、兄上（叔父なれど年の只二ツ若いなれば兄と云ふが常なりし）何を泣玉ふ、物欲きにや、吾はたんと錢を持ちたるにと、銀貨を出して見せけるに正は、連りに羨しがり「誰か與へ玉ひしか」「我が母樣なり祖母樣はけちなれば、平生僅かしか下さらねど、已か母上は好き人なりと」見びらかすを欲がる正、側目に見る妾のつらさ、我子なれば叱り樣もあるべきにと、只歯を嚙みしめる計りなり。其より正は肩せまき思ひ十分に肥立たず、折り節の寢覺にも、しくく泣くを何ぞと問へば、我は家もなきもの、乞食も同じものならんと、少さな胸にも抱きたる悲み、思ふにつれ妾迄、泣度くなるを押こらへ、否々御身も生長せは、麗しき大きなる家を建て與へんに、泣くことはなしと賺すを誠に受け、「其實なるか情願宮の如き大きやかなる朱ぬりにして與へ玉へ」と、樂しがりてはすやくと、又寢入るを見る親の氣は、焦熱地獄の呵嘖も此に比しては重からず。

年の九月十五日は先妻の鄕方の村祭り、長女は例の如く、敏雄を連れて出で行きしあと。分家なる同姓の叔母來玉ひて、妾に打向い「此頃某町には、名作の生人形の見せ物有り、私も昨日行きて見たり、さても巧みに出來たりし、片時も急き行て見よ」と云ふに、妾は左して氣も進まず、殊に孫も娘も留守なればと、否めど叔母は仲々に聞入ず「生れたる甲斐には斯かるものこそ見置くもの松の不在か夫か不幸殊に明日にて興行も終りなれば是非今日行き玉へ」と慫めて止まざりしに、良人も聞玉ひて、其は好き事を聞くものかな、必ず行て見んとの玉へは、「きく」も口添へ姉は實に不

在が不幸、妾は目界の見へぬもの、必ず案給ふな、留守は妾程好く計らわんに、必ず行て見給と、奧底もなく慫むるに、妾も遂に其氣になり、良人に正を連れ立て、行きしこそ是非なけれ。

歸宅りしは黃昏にて、暮鳥も塒を尋ぬる頃、自宅には分家の叔父、來給いて有りしか、歸り鼻に目を瞋き出し今日汝達は何しに行きしや、他人の娘を出しやり、後に盲者を殘し置き、浮々との見物三昧、人目は何とも思はぬか、大方嫁が奸計ならん、兄上（叔父は舅の弟なる人）の居らるれば、左は自由は出來ぬはず、と席叩て大音聲。妾氣も暮れ何と云はん樣もなし。良人漸く口を開きさる譯には候はねど、叔母樣の慫と、半分言はせず嚙み付けて、分疏なしと早や人に、罪を嫁するや、斯かる毒婦と愚夫には用はなしと、疊蹴立てゝ出行き給ふ。妾くやしさ悲しさに、いつそ涙もいでず、盲者千人とは好き例し、妾此までの心盡も知る人なくて悪む人のみ、前世如何なる業あれば斯かる憂目は見るやらん、いつそと思切て良人に向い、今日のしだらは皆私の無遠慮から、良人迄も愚者と呼ばれ、何面目に此家に居られましよ、情願離緣して下されと云へば、先刻より平氣に讀書して在りし、良人は此を聞て打笑い、さても氣の狹いものかな、己悪しくて叱らるゝはまだしもなり、我に一點の曇りなくば、例令何人の來るとも、吾に於てなにかあらん、打棄て置くがよし。「それにしても旨々と奸計に乘り此が何故して默されましよ」其なり己れ疚しき事なければ、寃は自づから晴る筈、叔母の隱謀は知れてあれど、老たる人と云ひ、親内の者、云ひ敗れはとて己が耻ぢ、况して此しきに離緣沙汰大人氣なしと諭志給ふに、漸く默して止みぬ。其後此事叔父の知り給ひて、嚴しく叔母を呵り給ひしと、人の知らせに日本晴の思ありし。其後は世の人も妾の義理を知りてにや、最と安々と暮志け

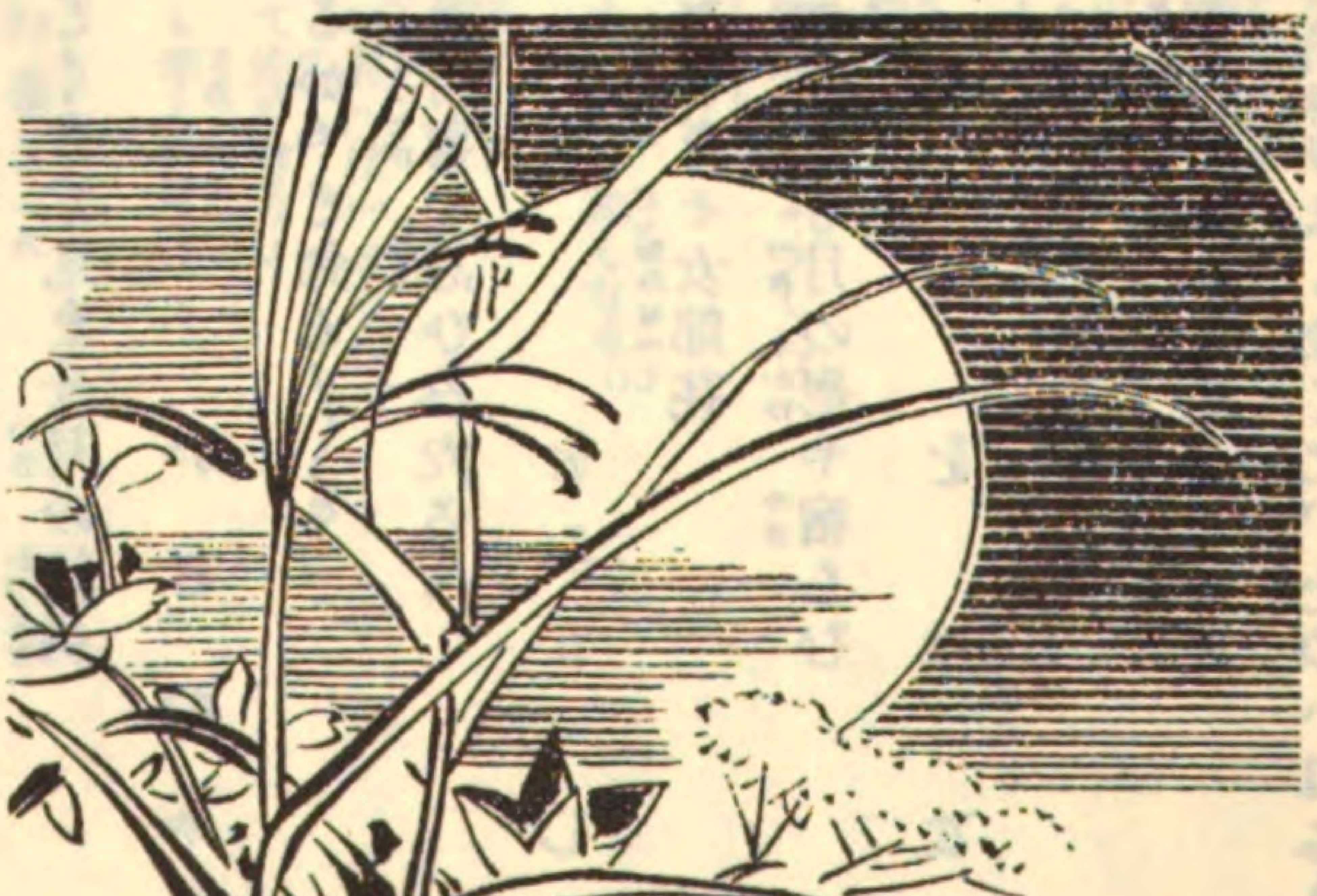
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ろ、今は世の欲徳も捨てたれば、只往生こそ大事なれ、

樓上待月

桐廻舍

堪かたかりし暑も命とたのみてし扇も、やゝわすれかてなる人の心よりや、秋は立けむ、物さひしうはかなけなるゆふへ、何處よりか鳴立しくつわ虫の音の、はたと絶つるにあや志とおもほへあへす、門邊に入のけはひこそすれ、こは某の御館よりはゆま使賜りしなりけり、つゝしみて仰事承れは、庭の七種をかしうなまめきそめたるを、つれなくてやは今宵しも月にめてはやさむと思ふを、とく〳〵まうのほらすやとてなむ、さらぬたに御園の眺いかになと志たこひせる身の、いかてたゆたふへき御使と共に、心もそらに走りつきぬるに「眞萩。藤袴。苅萱。女郎花。尾花。なといへる女房ら、また撫子。玉菊。なんとよひなせるめのわらはら、おのかほと〳〵につけていとにほやかに、かたちひきつくろひたるか出來て「上にはいたくまたせたまふにいさ〳〵とて高殿にあないしつ、けに上のみけしきうるはしかるに月はいまた登らぬと、心の雲はとみに晴ぬ、上は月待ほとのなくさめに、自から宇治の木のめの



あるせしむとおふせて、待月といふ題を殘して、御かこひにいらせたまふ、今宵はゐやなともとかめたまは

ねは、まらうとの君も妾らも、ひとつにまとゐして硯の海に涙たゝせつゝ、何をかもあさり得んと、かたみにきそひし傍より、撫子の童筆とりて

な で し 子

なてしこの月待宵の露けさを
母やこふると人の見るらむ

といはけなううたひいてしにあはれらうたしなとたゝへあへるに、玉菊の童もまけしとや

た ま き く

待間にも千代やふるらむ玉菊に
ひかり添へてよ秋のよの月

とたやすけによみそへしかは、たれも／＼はけまされて、大あみをもろもちにひき出たらん如、重けなる口つきにて

ま は き

小男鹿のいかに見るらむ月待て
思ひみだるゝ萩の花妻

ふ し は か ま

紫のゆかりに匂ふ藤袴
とくきて見ませ月の桂男

か る か や

露の身の世はかるかやと知る／＼も
月待宵そ思ひみたるゝ

を み な へ し

露はかりあたになひきそ女郎花
やかても月の影や宿らむ

を は な

思ひわびまねかは月のやとらなむ
尾花か袖の色あさくとも

なととり／＼にかいしるさゝほとに、上のいねふりいろに見えたる木のめも月も、匂ひ出たれは、妾ひたまけにまけていまは待といふ事もならねば

七種のたかく匂へる高殿の
　下よりのぼる月のさやけさ

とからうしてうめきぬ、上をはしめ人〻はうちわらはせつ〻、盃の數めくり來れど、これさへたしまぬは又まけて、見くるしうも食物のはやしに、狸なす腹鼓打つ〻、夜もいたう更ぬれはとてまか出ぬ

『小川と村童』

B. C. 生

野路の小川のゆるやかに
　砂原縫ふてながるなり、
水面は深く清くして
　立つさ〻波のちよろ〳〵と。
夏の暑をやなぎ影
　す〻しき風に吹かれつ〻、
な〻つ八才の稚子か
　五人六人釣すなり。
かわる〳〵に竿を取り
かわる〳〵に餌を取りつ、
　眼は浮子にそ〻ぎつ〻
　なぶる魚のおもしろし。
下ぐれば上ぐる釣糸の
　長き時の間釣しけり、
獲りし釣籠に中すぎ
　落せし魚は二つ三つ。
子供はやがて倦みにけり
　或は疲氣をもようしぬ、
彼方に見ゆる芝原は
　こよとて招く如くなり。
彼處に行ひて遊ばんと
　一人が言へば一ときに、
かなたに向ふて走りけり
　魚も竿も打すて〻。
踏みとめられぬ暑さへ
　物の數とも思はじな、
彼方此方に走せまわり
　相撲取るあり狂ふあり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

子供はやがて疲れつゝ
　元の河邊に歸り來て、
したゝる汗に堪へ得ずに
　ばた／＼水に飛び入れり。
底に沈みてくゞるのは
　魚をあさる鵜の如く、
水音高くおよぐのは
　むつれて遊ぶ友千鳥。
小川と兒供をたとふれば
　梅に宿かる鶯か、
いまを盛りの野の花に
　辿る胡蝶の如くなり。
日も早や西に傾きて
　吹く夕風のそよ／＼と、
子供は家路に就きにけり
　小川はたゆす流るなり。

◎普通裁縫書　前編、後編、附錄の三冊に分ち前編は教授的、後編は技術的、附錄は參考的に反覆丁寧裁縫術を講したる家庭必携の良書なり、錦織竹香女著、發賣所神田區通新石町同文館、定價三冊六十五錢

家政

目下の衛生

◎扁桃腺炎　則ち咽喉痛は主に感冒より起るものにして、秋季より冬季に移らんとする季節に患者多し、又此病患の習慣ある人は月に二度三度も襲はるゝことあり、此症は咽喉の兩側に梅乾の如く腫れて唾呑をするか食事する時に痛を感ずるものなり、病期は五日乃至七日にして全癒す、治療の法は五十倍より百倍の鹽剝水（普通の藥舖にては劇藥なるが故に販賣せず、藥劑師ある藥舖に就き求むべし）を以て數々含嗽を爲さしめ、食物は消化し易き滋養品を與ふべし、室內は溫暖にして空氣の流通宜しき所を要す、頸邊には氷嚢か冷水に浸したる布片を纏はゞ其快癒を速にす此症の習慣ある人は每朝コップ一杯の冷水にて含嗽を

爲すことを怠らざれば其豫防とするに足るなり

◎氣管枝炎　此症も秋冬多くの患者を出す、此頃氣候急變のためどこの醫家も頗る繁忙を極む、五日より十日の間に全癒するものなれど、忽諸に附し置く時は變性することあれば速に治療にかゝるべし、則ち身躰を温暖にし室内の空氣を自在にすることは申すまでもなく、患者胸苦しきに至らば粥布を張り、若しくは芥子布を胸部に張るべし、芥子布の製法は一器に芥子を入れ之に熱湯を注ぎ、「フラネル」の如き布片を浸し、能く浸して其部に貼用すべし、之にて効用なき時は芥子泥を用ゆべし、芥は新鮮なる芥子を鉢又は茶碗に入れ熱湯を注ぎ之を攪拌して泥狀となし、布片又は丈夫なる紙に厚さ五分より一寸の間にのばして、十分乃至二十分其患部に貼用し、皮膚の紅色を呈するを度とし之を除却して其痕を微温湯に浸したる手巾にて能く柔に拭ひ淨むべし、乳房を避くべし、但し西洋芥子は其性强きに過ぐるを以て等分の大麥粉を混し、小兒には三分二の大麥粉を混すべし、日本の芥子は其まゝ用ゐてよし、これは胸部の疼痛のみならず、食傷などにて腹部疼痛に苦まば、此法を用ゐて宜し、時下宛も吐瀉病（コレラにあらず）流行す、患者は此法を用ゐ玉へ

◎下痢　東京近縣には赤痢大に流行し、又東京府下にも病魔襲來せる今日なれど、府下には未だ甚しきに至らざるは何よりの幸福なり、然れども赤痢とまで至らずとも、近來下痢の多き季節なれば能く攝生を重んずべし、其原因は感冒若しくは飲食物不衛生より來るものにて（傳染病より來りしものならずば）少しく意を看護に用ゆれば醫師の手を煩はすに及ばず、其簡易治療法は患者の身を動かすを禁じ、床中に安臥せしめて成るべく食を絶たしむべし、患者若し空腹を訴ふれば、牛乳、粥汁若しくは葛湯等を微温にて少しづゝ數度に與へ下痢の止りし後ならでは固形食を與ふべからず、

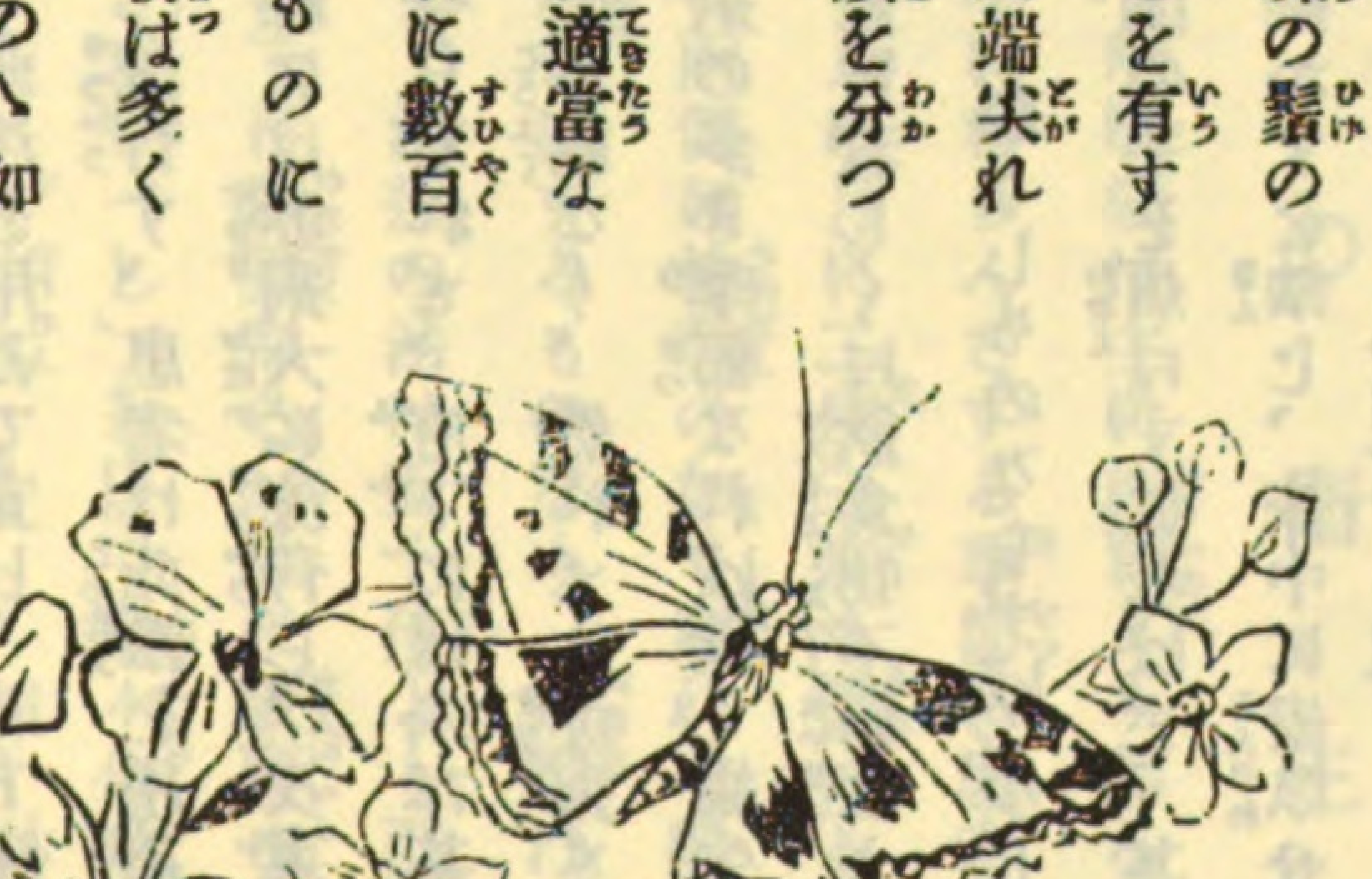
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

腹部は「フランチル」若しくは温暖なる布片をまとひ、下肢をも温むべし、小兒など此症に罹りし時は一日三四回も鹽湯にて半身浴を爲さしめて差支なし、筆の序に記す、赤痢傳染の道は大便の媒介により、不良の飲食物、不熟又は腐敗菓物、永く續きたる惡天氣此症を助成するものなれば一層の注意を要す、赤痢に罹らば打捨置くべからず、速に醫師の診斷を乞ふべし、其兆候は全身を萎靡し食慾を缺損し、惡寒發熱、吐氣又は腹痛し數回の下痢を爲すも快く通利することなく、粘液、血液、膿汁の如き大便を通ずるを以て知らるゝなり、醫師にかゝらば萬事其命令を受くべし

蝶

少年諸君の樂の一なる蝶の捕獲及保存の方法を記す前に蝶の種類を示すは便宜なれども、其は餘り諄々しき業なれば（英國産の蝶のみにて其種類七十種に上る）こゝには單に其捕獲と保存の方法を記すのみなり。

さて蝶にも種々の種類あるが、之とまぎらはしきは蛾なり、蝶と蛾とは其の形躰に於て判然區別し易からざるものあれども、蝶の鬚の端には薄き節（匕狀）を有すれども、蛾の鬚は其端尖れるを見て彼我の種類を分つべし。



雌蝶は其子を養ふに適當なる植物を選みて其所に數百の卵を產み付くるものにて、選ばるべき植物は多く藪の中に定まるものゝ如し、藪は雌蝶が子を養ひ又子に食物を給すに最も便利なればなり。

此の藪の內に產置きたる所の卵が孚化して蜈蛉と成り

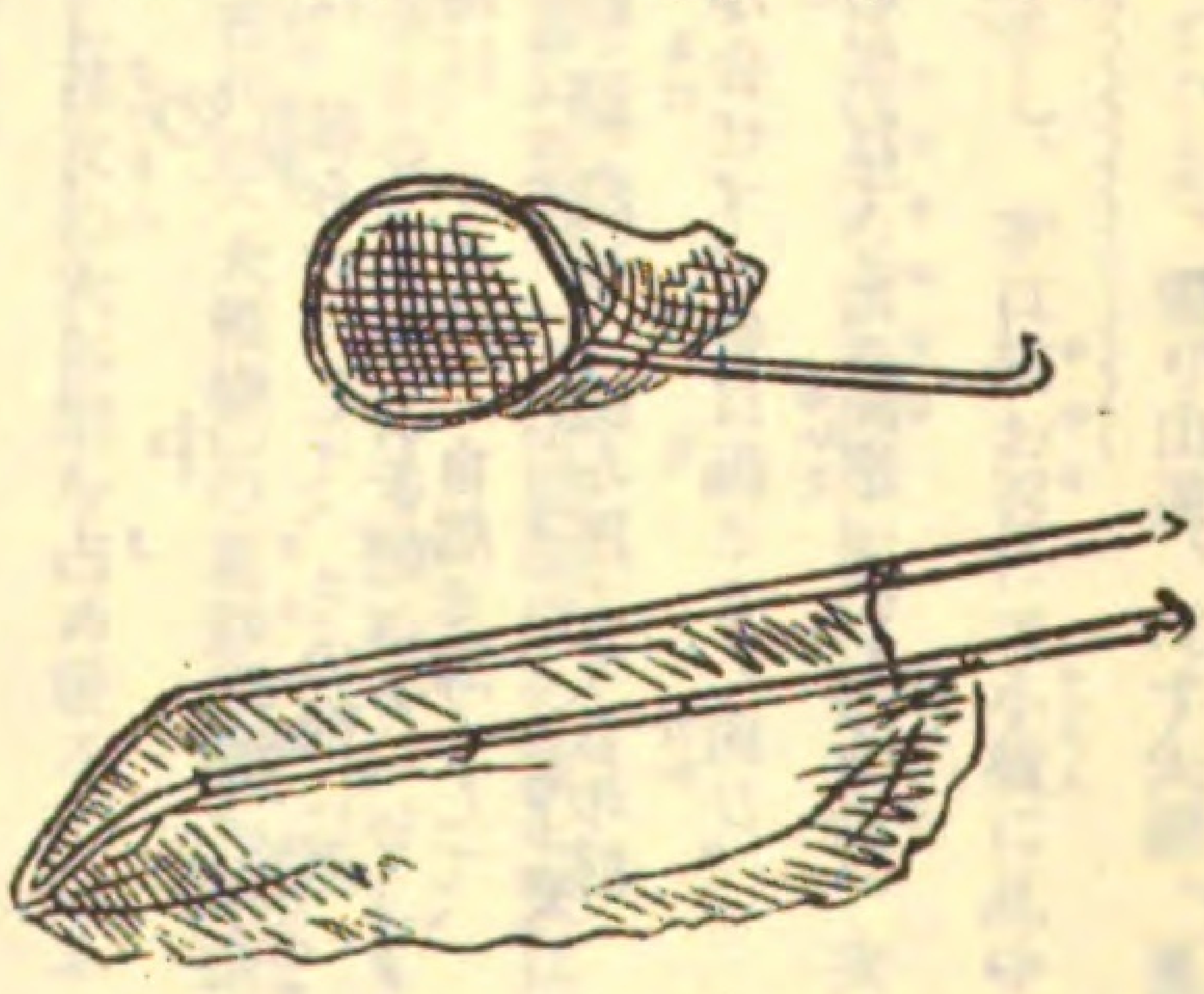
漸く生長して自ら食物をあさる如くなれば、間もなく驚くべき働作を以て繭を造る事殆ど蠶と同一なり、此の蜈蚣は温暖なる季節に至り全く蝶に變化して美麗なる羽を廣げ繭の外にまひ出るに至るものなり。

悪戯の捕獲又は殘忍の捕獲に就ては語るを欲せず、唯だ天然を愛し、造化の妙を窮めんとする人のために、如何にして蝶がおとなしく捕へらるるか、如何にして勤勞少なく捕へ得るかを説明すべし。

蝶を捕獲するには先づ網と懐中函と針とを用意すべし、網には通例かぶせ網と環網と呼ばるゝ二種の物あり、圖中長形なるはかぶせ網にして圓形なるは環網なり、環網は携帶に頗る便利にして、縁輪と網は自由に疊まれて懐中する事を得且又其の柄の螺旋をはづせば杖となりて疲勞したる採集者の歸路を助くべきものなり、頗る輕便に造られたる機具なり、又函は一「インチ」の八分の一位に「コルク」にて底をつけたるもの専ら英國にて流行す。

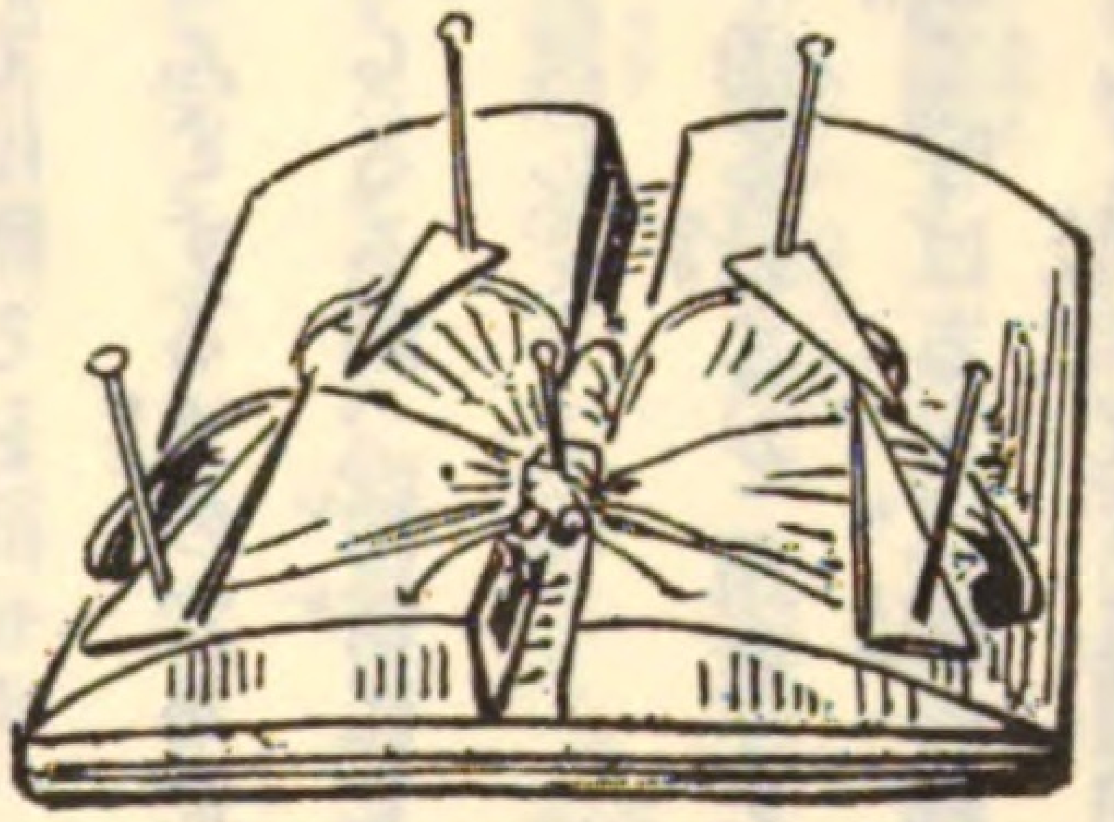
右にて捕獲の器具全く整備したれば何時にても蝶の捕獲を試み採集するを得るなり、然れども温暖なる春の日花咲く野邊に於て鮮やかなる葉の上に、蝶の戯むるを見る時を最も好しとす、

能く熟練したる採集者は人の多く通行せざる處に至り屢ゝ珍らしく且貴重なる蝶を捕獲す。



採集者が花の上葉の間に美麗なる蝶を認めたる時は注意に注意して心を潜め氣を平にし徐々と近づき一ねらひに捕獲するなり、若しねらひ誤りて逃げたる時は蝶の後を何處まで追ひ往くとも到底網の内のものとはなしがたし、然れども蝶の種類により再び來る攻撃に甘んじ容易に採集者に馴れ親し

むものあり。
捕獲したる蝶を表本に作らんとするには蝶を傷つけず捕へ羽粉の落ちぬ樣家に持來り、「コロロホルム」の氣ある箱の内に納れ置くべし、暫時にして蝶は苦痛を感ぜずして死す又他の方法は蝶を捕獲するや否や直ちに壓死せしむるなり、斯くの如くするも蝶は苦痛を感せざるなり（コールマン曰く羽蟲は苦痛を感ぜず）蝶の死したるを見ば板にて造りたる臺の上に載せ、羽を廣げて名札の片を躰の四方に置き、其上より留針を刺すべし、斯くする時は蝶の體を平に保存せらるべし。



數日にして乾上りて完成したる表本となるなり此の表本を保存するには抽斗多き函に一個づゝ置くか左なくば「コルク」にて底をつけたる一個の函内に集め置き、其上を薄き白紙を以て被ひ置くべし。
斯の如く函内に整列し終らば其蝶の名、日附（捕獲したる）其他諸君が好む所を附記し置くは面白き事なり。

夫婦の中

夫婦の中の親しみも、禮ある中は、珍らかにして、その情に至りて深く、また厚し、禮を失ふ時は、その情、自然と薄くして、離別もまた、遠きにあらず、仁義遜讓は、禮を厚ふするの媒にして、この禮、媚諂と脊を合せす、智は痴とし向ひ、誠は虚と隣れる、さあらば、心やすだてと、愛想づかしは、いつも仝居と知るべし。（柳澤淇園）

社交一斑

流行の栞

流行子

袷の流行豫報

府下の各呉服屋にては目下冬物の仕入に忙しき最中なるが、今其成

行を聞くに機元にては昨年の當時よりも凡ての物品の產出少く其相場は昨年よりも品によりては高價のものあり、尙此先とも下落する模樣なし寧ろ騰貴の傾向ありといふ。

本年流行せんとする冬着の柄と色とは、大率今春の流行に變りなきやうなるが一躰は柄に於て婦人物なれば小紋多く男物にて大名、萬筋、子持筋、薩摩縞等多かるべし、若し其華美なる縞に至りては、瀧縞、松魚縞、やがすり多かるべし、地色は紫根、花色、お納戸、紫、壁れづみ、利久等(女物)最も多く流行界に勢力を振ふべし、模樣の色に至りては玉子色、金茶、小豆鼠、紫根、白茶、淡葉鼠、銀鼠、冴茶の內を出でざるべし

さて如何なる物品が流行すべきかを記せば、男物にて第一諸糸織、第二つなぎ糸織、第三市樂、第四結城紬(以上衣服にも羽織にも)第五大島紬、第六八王子、米澤、越後の節糸織、第七伊勢崎銘仙、第八米澤琉球、第九瓦斯糸本四つ双子、第十愛知結城、(以上第四までは直段の如何にかゝはらず、最も流行すべきものを順次に記したれど、第五以下は直段に準して記せり、此內平氏的流行品は瓦斯の四つ双子と節糸及び銘仙等其他に秩父縞あり)

男子用紋付羽織は第一七子、第二市樂、第三羽二重等にして三ッ紋六分と五ッ紋四分の勢力、紋の大きさは鯨尺九分より一寸一分の間同裏地は綾子にして一枚ものには風景模樣多く、切地ものは古代模樣多し

婦人物は殆ど紋お召一品に限るやうなる觀あり(これを着されば交際社會へ出にくきやうに)其柄は前記せし地色に割山椒、大小あられ、角とほし、屋根板、むじな菊、青海波、さぐさ、變り山道、はす矢絣、夏菊紅葉、牡丹、垣根くづし等最も人氣多し、次は縞お召にて小紋に見ゆるもの、次は米澤及八王子の糸織、次は桐生の新糸織、次は秩父縞、次は糸琉球の縞及かすり、次は細双子

高等なるもの(たとへは紋お召)の下着は贅澤にせば同地質の通し又は胴ぬきか、或は紋鹽精を上着の色にうつるやうに染めて胴ぬきにせしものなり、而して最も流行すべき下着は古代形(大模樣)の更紗縮緬を胴拔にして一枚又は二枚を重ぬるもの、蓋し注文の大多數を占め居るといふ

婦人羽織は黑縮緬の無双仕立にして五ッ紋を染めぬきしもの年々流行するに至りぬ、普通にせば黑の三ッ紋にして綾子の裏地をつけしもの、妙齡一天張に至りては紫根、小豆鼠、裏葉柳、淡利久、銀鼠、壁鼠、鳩羽鼠等の色を三ッ紋に染め、裏を綾子或は綸子をつけたるもの、紋の大きさは鯨尺七分五厘より九分の間流行す、次は小紋にして前記紋お召の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

部に記したる柄合最も流行すべき傾向を有す

要するに今春までの婦人紋付羽織は黒六分、小紋三分、色物一分の割合にて流行せしが、今秋よりは黒四分、小紋三分、色物三分の割合さなるべし

帶は男子にて筑前及八王子博多の獻上或は獨鈷（お納戶、紺、茶は普通なれど金茶、壁れづみ、銀れづみ、花色、黒等は新流行）次は矢張博多の紋織（片側無地）か、西陣の繻珍織等、女物は例の繻珍又は緞子、厚板織に限り、腹合帶は片側黒又は色の唐繻子又は小柳繻子にて片側を繻珍又は繻珍織等

附けて曰ふ、吳服物の産地は數多けれど、男子の高等着は殆ど八王子に限り（衣服、羽織、帶、袴等）婦人の高等着は殆ど京都に限ろ（白縮緬は江州長濵の生産にせよ）は衣服世界に東西二大勢力を示すものにあらずや

小市白縮緬一反（七八圓より十五六圓）丸帶（七八圓より二十圓以上百圓）片側繻子（四五圓）同繻珍（五圓より八圓）男帶（三四圓より十二圓）諸糸織（十圓より二十五圓）繫糸織（同上）市樂織（八九圓より十五六圓）大島紬（十圓より十五圓）本琉球（六七圓）結城紬（七圓より九圓）節糸織（四五圓より七八圓）糸織（五六圓より十圓）銘綠（四圓より七圓）秩父縞（三四圓）瓦斯双子（二三圓）細双子（一圓より一圓半）地双子（六七十錢より一圓）米琉球（三四圓）本八丈（五七圓）紋お召（十五圓より二十圓）縞お召（七八圓より十圓）裏地花色糸好一疋（五六圓より十二圓）同秩父一疋（四五圓より八圓）中花及淡花糸好一疋（六七圓）同秩父一疋（五六圓）本紅糸好一疋（五圓より八圓）同秩父一疋（四圓より六圓）同羽二重（八圓より十五圓）羽織裏緞子（三圓五十錢より六圓）綸子（二三圓）甲斐絹（二圓前後）＝（價格白木屋調査）

馬　科學

松ケ枝

馬は單蹄を有する哺乳動物でその堅固な脚は容易に硬地の牧地や砂地の平原などを至て輕くかけ廻るとを得させます

野馬が群をなして集まるのは何故でしよふ

野馬は氣候の變遷に從て新らしい牧地を逐ふて土地を

變ひて移りますからそうして同一の必要か同時に數多の馬に起るのを以て自然彼等は群棲するやうになり來るのでムいます

何故に馬の毛色が樣々に異つて居るのでしやふ

馬の性來の毛色とは何色であつたろふかといふとに付色々な推量が學者の間に起つて居りますが未だ確定した考案は下りません馬の毛色の異樣なのは或は本來の遺傳かとも思はれますが又氣候の差異年齡の變遷などは慥かに大な關係を有して居るやうでムいます小馬は樣々の色に變はりますが充分に發育した時期と老年との間に於て起る變異は常に濃色から薄色に向つて變じるのでムいます

二頭の馬共に牧場にあるとき一頭は他の肩或は頸を噛ぢり居るをみると暫々あるは何故でしやふ

是れ或る牧地方に數多ある一種の有害なるうるさき蠅の襲擊より免れんが爲めで即ち一頭の馬が己れより蠅を追ひ除くれば同時に他の馬の爲めにもなるからでムいます

馬が上下の口唇に鬚毛を有して居るのは何故でしやふ

これは馬が草喰ふて居るときに鼻孔に蠅やその他の昆虫の入らぬやうに防ぐ爲めの器でこの目的を達するに充分な丈け鬚毛は密に生いて居りまする

何故馬は眉毛を持たぬのでしやふ

なぜなれば眼の位置から申ても走つたり草喰ふたりする時の頭の方位から申ても眉毛の如きものは不必要だからでムいます

上部の瞼殊に外方の隅の處に毛がありますのは光線が上から射來るからでムいます馬が起立して居るとき殊に草喰ふて居るとき側面なる眼の位置は光線の入射も昆虫の襲擊も雨露の注入も主もに顳顬の方角よりするやうになつて居ります上瞼の内方の隅には何等の毛も

ない事もありますしよしあつても至つて僅かでムいます何故なればこゝには別に危險の懼れがないから防ぐ必要もないのです僅かの光線が下から射入しますから下瞼の毛は短かうムいます然し草喰ふて居るときなど昆虫は內方の角の處から容易に匍ひ登ぼつて眼に害を致しますから主要なる毛はそこに備ひられて居ります る

馬には眉毛はありませんが上瞼には數多の毛即ち刺毛が備へられてあり又瞼の褶が突き出でゝ必要な場合には眉毛と同じ働きを致します或人はこの瞼の褶を目してある病氣の作用だとする人がありますが甚しい誤りでこれは少しも健康に關した事じやムいません

何故馬は耳の下に四角な大な顋を持つて居るのでせよふ

大なる壓力に堪えせしむる爲めに齒は深く顋の中に凹嵌せられてありますそうして咀嚼の筋力が使用せらるゝ時唯だ顋を閉ぢる斗りではなく咬み碎いたり齒を側面前後に磨擦したりする爲めに大きな場所が强力な筋の置處として顋の中に備へられてあります即ちこの筋は齒を閉ぢると下顎を上顎の方に引き寄するとの二つの働きを持つて居るのでムいます

深い腹を持つて居る馬は何故ながく勞働に堪えるとして云はれて居るのでせやふ

なぜなれば身躰が右の形狀に作られてあります時は通常の馬よりはながく食物を蓄ひて居ることが出來ますから從て一日の勞働もながく忍耐することが得るのです

躰の大さに比例して馬は凡ての動物中最も小な胃を持つて居りますもし馬が牛のやうに四度も反嚙せねばならぬ胃を持つて居りましたのならば何時でも直ちに奮力するといふやうなとは望れますまい馬の胃は他の獸類より數等勝つた規律を以て食物を消化致させますも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し馬が一桶の水を飲むだといたしまするとハ分間立てば水は少しも胃に殘つて居りません水は速かに大な臓腑に通過して仕まひます

馬に肝藏のないのは何故でしやふ

馬は消化の時間に間絶がありませんからそうして膽汁は作らるゝや否直ちに使用せられて通過して仕まひますからでムいます他の獸類の塲合では肝藏があつて膽汁が必要な時期まではそこに蓄ひられてあるのです

齒の狀態に因つて馬の年齡の判斷せらるゝのは何故でしやふ

何故なれば若い齒は切齒即ち前齒の表面に窩が見られますが齒の使用と共に漸次にこの窩が摩滅して餘ります凡ての馬に於てこの摩滅の有樣が至て規則正しく起りますので即ちこの窩の摩滅の狀態が年齡を度かるの規準とせられて居るのです

馬に與ふべき穀物は何故前きに碎いて遣らねばならぬのでしやふ

馬の齒は碎かざる穀物を咬むに不適當でムいますから穀物は屢々その儘で胃の腑に下る事がありまするそうすると少しも滋養になりませんよしなつても至て僅かでムいます

馬が餘り早くから難儀な勞働に使役せられますと充分の大さに發育しないのは何故でしやふ

餘り早く勞働に使役せられますと他の軟かな部分が充分の形量に達しないうちに骨の結合のみ完備しますので即ちそこに成長を止めて仕まひます

目印を與えられぬとも導かれなくとも暗夜獨りで正路を見出して行くのは何の作用でしやふ

馬の眼は晝間よく視覺の作用に適して居るのみならじ網膜の作用によつて夜間は又奇妙にも感觸を受くるやうになつて居るからでムいます

日が暮れて月無く寸前分らぬ闇みの夜に旅人が路を失

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふて苦しむ時彼の忠實なる馬は必ずや安全に彼れをその家に携れ歸るで厶いましよふ路はよし如何に難曲でも障害物は如何に多くとも決して間違ふたりする事は厶いませんこれは實に生理學上最も不思議な事の一で充分賞賛の價値がありましやう

荒い馬を統御し馴致するには何でも人は馬の主人だといふ事を敎えねばなりません

馬は犬のやうに阿ねる事は致しません馬の性情は至て高尙でしかも然し火急の塲合に立ち至りますると馬はその主人の傍に起立して或は主人を己が背上に安坐せしめて飽くまでその主の爲めに盡くします。

雜錄

文がら集

其四　俳諧堂主人

賴山陽江戶にある長子聿菴に贈りしもの

任幸便申つかはし候、老拙幼時先大人書入保元物語、書入義貞一代記などいふ繪本を江戶より被下候て、一生史學自是、罔極の恩の一端と存候、因て思ふ又次郎も早其節の拙者の年齢に相成候間、右の樣の繪本見覺えさせ度、當地書林などは非武家原故か、狐の嫁入位のもの丶外は、武者繪といふてもツマラナキ物共許也、江戶にはあるべし、より〳〵心掛け御調越被下候、來春歸國の時までといふては太遠矣、幸便御屋敷便にアマリ不高直分可被下候、直段申こされ候は丶つかはし候てもよろしく候也

八月廿四日　襄

餘一どの

追に老夫朝夕、粥に蕎麥にかけてたべ候淺草海苔第一要物なり是も御越可被下候以上

又次郎とは人も知る賴復支峰先生の事なり、子を思ふ

親心繪草紙を江戸まで注文するなど誠に難有き恩愛なり、寸簡なりといへども山陽が子供養育の法をも知るべく、又其初年史學に志させし初めの事を知り得べく、誠に得難き珍什なり、文字のむつかしきは流石學者の手紙なり、諸子よく心して讀みたまへ。

其五

屋代弘賢其妻に與へしもの

世話女房十二時（午前六時）

朝晩はよッぽど涼しくなつたネ

妻をむかへ候事は、なにぞといへば、先祖を大切に思ひ、父母に孝行すべきため、次には子孫相續のためなり、我等事、母樣御一人御座なされ候故、朝暮大切に柔和に、御かいはう申呉れられ候事、專一に候、すへて男は外のつとめを大切にし、女は家内のこと、萬事油斷なく、取あつかひ候事、第一に候、さて孝行と申すは、有福にて物品不足なきをいふのみにあらず、貧窮にて不足勝なる中にも、何がな御心を慰め候樣に、明暮心かけ、かりそめの事にも、思召にそむかぬ樣に、致度事にて候、かやうに口にはいひても、身にはそれ程に及び不申候、我等心付不申候ことは、幾度も心を添へ、異見申くれられ候へかし、女はすべて他人の家にゆくものなれば、舅は實の親も同じことにて、いさゝかも麁末なる取あつかひは、あるまじき事なれども、とかく世間には、妻をむかへたる上にて、

其妻の心にひいきいたし、親にまでそむき候たぐひも有之候は、心ならぬ事故、我等事は、そなたの心付にて、一段と御機嫌にそむかぬ様に、たのみ入候、又一たび縁を結び候ては、一生事故なく添とげ申べきこと、本望にて候、聖人の敎に、妻の身持あしきはさるべきよし、仰おかれ候七つの品あり

一父母に不孝なれば去る

一子なければ去る

一淫亂なれば去る

一しつとの心あれば去る

一あしき病あれば去る

一言葉多ければ去る

一盗すれば去る

如此さだめおかれ候へども、子なきと悪しき病との二箇條は子細あることとなり、すべて我等心底に應せざる身持をいたされ候へば、それまでの縁と覺悟いたし可申間、随分と精出し、萬端世話いたし呉られ候様に、たのみ入候、これ等の趣は、申までもなく候へども、たがひに隔心ありては、不和の基故、思ふまゝの事を、かねて申入候也。

世話女房十二時（午前八時）

行ツていらつしやい

是は屋代輪池翁が其妻にかいてあたへしものにして手紙といふにはあらず、誠に一篇に婦女貞訓世に珍らしき重寶なり、名高きために八方に弘まり知りつる人の少なからぬをこと〲敷てゝにかゝくもいかゞとは思ひしな

れども、まだ見ぬ人のためにもと、今は茲に出せしなり、

山陽の手紙は吉野氏の藏なり、弘賢の書は余か先年或人の寫を借りて寫せしもの原本は今何處にあるや知らず。

其六

近藤勇が飯綱權現へ奉りしもの

乍恐願書證文の事

一我等儀劒術不器用に付、何卒飯綱權現様之御慈悲を以て諸人に聞え候處の名人になし被下候樣偏に奉願候

一諸人に劒術勝利の趣ほこり申間敷事

世話女房十二時（午前十時）

まだ内閣はきまらないかしら

一當寒稽古之内は毎朝早起可仕候事

一我等右之願御高恩にあづかり候上は毎年十月十五日何品なりとも可納申候事

天然理心流　島崎　勇血判

嘉永七年甲寅十月十五日

飯綱大權現樣

かゝる書を紹介すること、よしなしと笑ふ人もあるなるべし、されども決してさることにならず、何事によらずかゝる程の熱心なくては叶ふべからず、西洋の學者いへることあり、天は自からを助くる人を助くるなりと、近藤勇の上達は飯綱權現の助けにあらず、其飯綱權現に賴んでもと思ふ心の助けしなり、讀む人こゝに心あれよ。

千代女が教訓の發句

さきに教訓の發句と題し、多くの人の句どもをな

らへ上げし事あり、其折りにもいひしが如く敎訓の發句は、眞の俳壇に於ては何の價値はなきものなり、されどもこれはそれとは別なり、決して俳を傳ふるにあらず、俳によりて敎訓を傳ふ、されば俳は客にして敎訓は主なり、見る人願はくは其心せよ、

今は有名なる加賀の千代が全集よりあつめ得たるものゝみを紹介するなり、

手折らるゝ人に薫や梅の花

これ仇を恩にて報するといふ心を咏ぜしなり、人もしかゝる心を以て凡ての物にむかひなば、決して不和などいふことなく却て人を感化し得んか、

結ふと解ふと風の柳かな

これ「百なりも」の句と同じく唯一心の持がたにて善ともなるべく惡ともなるべしといふ訓めなり

我か風で我ふき落す胡蝶哉

人皆己れの心によりて常に己れの身をせむこと、たとへば胡蝶の我と我が羽風によりて眠りさためず、身をさわかすにも似たらんかし、

短册は風とあつかふ櫻かな

櫻をほめて枝につけし短册は却て風を起すの媒となり、つらや花を散らしなんこと、たとへば人に褒められて心に弛みの來り遂に其身を亡ぼす如し諺に粋か身を食ふとはやゝ此句の心に等し、

世話女房十二時（午前十二時）

そんなにおこぼしぢやないよ

蝶々はねても澄すに雲雀哉

寐て暮す蝶さへあるになどか雲雀の噪くぞや、げに考ふれば世は様々なり

淋さはきく人にこそ閑古鳥

心に感じては花にも涙を濺くとかや、されば閑古鳥の淋しき音も實は聞く人の心による、

世話女房十二時（午後二時）

早く仕立あげてしまおふ

來て見れば森には森の暑さ哉

四六時中妄想の影を追ひ、一心の安きを得能はざるものは此句を以て訓むべし、來て見れば森にも同じく暑さはあるなり、

朝顔は蜘のいとにも咲に鳧

蜘の糸にも美しき朝顔の花の添ふて咲くを知れば、夫に對する妻の不平などはあらざるべし、

秋風のいふ儘になる尾花哉

柳の枝に風折れなしといふ心なり、

秋の野や花となる草ならぬ草

芭蕉の瓢の句千代女が百生の句共に同じ心なり、本同根の草にして或は花を咲くもあり、或は咲かぬものもあり、皆是心の持かたなり、

行水におのが影追ふ蜻蛉哉

己れか心に様々の妄想を畫きなし、かれは必ず斯くあるべし、是は然あるべしなどあてもなき事をあてにして、來て見れば事皆心と相違して、一つも成功するものなし、是實に、ゆく水にうつる己

か影追ふ蜻蛉ごとし、

今日の菊獨咲ではなかりけり

功のなるは成るの日になるにあらず、必ずや依て來る處あり、菊のさくは其咲くの日に獨りて咲にはあらざるなり、

閏月の其めも見へず年の暮

閏月はた暮に及んで其めも見えず、働いても〳〵日猶ほ足らぬ世の中と是によりて知り得べし、

瓶わり柴田（口繪のゑとき）

永祿十二年佐々木承禎、柴田勝家が守る所の長光寺の城を圍みて攻め遂に總搆を打ち破る勝家本丸に在りてこゝを專途と防ぎ戰ふ鄕民佐々木が陣に行きてこの城は水の手遠く遙かなる所より水を取り候それ取りきる程ならば城は保べからずと告げ知らせければ承禎喜びて水の手を取りきりたり城中これに苦しめども弱れる色を顯さす承禎これを見む爲めに和平せんとて平井甚介を使として城中に入れたり平井勝家に對面して手水を請ふ瓶に水の滿ちたるを小性兩人してかき出たるに平井手を洗ひければ小性殘れる水を庭に棄てたり平井歸りて斯くと言へば事の違ひたる故に怪しみあへりかくて城中水既に竭きければ勝家明日は討ちて出でゝ切り死せんとて諸士を集め最後の酒宴をなす殘れる水を問へば二斛ばかり入るべき瓶をかき出すさらば此の間の渴きをやめよとて人々汲みて飮みたれば勝家薙刀の石突にて瓶を碎きたり夜明け方に門を開きて打ち出づ佐々木思ひもよら

世話女房十二時（午後四時）

さんや何がこさねやうや

されば大に敗北しけるに勝家首八百餘級を得て岐阜に獻ず勝家は猶長光寺に在り信長感狀を與えて賞せらるゝこと大方ならずこれより勝家を瓶わり柴田と世に稱しけり(常山紀談)

家庭子曰く斯の如きもの豈戰爭のみに限らんや、一家は猶一城の如し、希望あり且つ光榮ある家庭を維持して世に處せんとするもの須く、勝家の決斷、勝家の勇猛なからざるべからず、而も社會は常に平和の戰爭を爲しつゝあるにあらずや

世話女房十二時（午後六時）

坊ッちやまぽちやゝゝ好いと

わらはの理想

無名女 保羅

我これらの望を既に得たりと言ふに非ず亦すでに全ふせられたりと言ふに非ず或は取ることあらんとて我たゞ之を追求む

困難は辭する所に非ず、夫の不德すらも恐れざるべし、況んや會計の切迫をや、困苦は戰を意味し、戰は勝敗を意味す、勝ば眞の光榮なり、よし敗るゝとも、困苦を廻避して安逸を 夫婿の 汗に希ふよりは 立派なるべし、討死するまでのことと也。若しわらはに女子としての德操を立て得べくんば實に此等の戰に由りてこそ建てらるべし、勇士は敵の强からんことを願ふとかや、わらは亦た不肖なりと雖も女子の中の勇者の一人にてあらまほし。夫怒りてわらはを理由なく打つとも忍ぶべし、恨まじ、これ卑屈にや、否、愛は忍ぶことをなす、忍び得ば德建てられしなり、斯る時、夢にだも女

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

權論を念頭に浮べざるべし、これ爭ふなり、爭はゞ愛何處にある、夫不理なるが故に忍ぶなり、わらは若し此理想を心うれしく實行し得ば如何に幸ぞ、貧の洪水押寄せ來りて竈の火を打消すに至るとも、其故を以て夫に水のみを飲すことなからん、況んや財布たゝきて夫に迫るをや、況んや夫を捨てゝ走るをや、家貧ふして良妻を懷ふとかや、實に良妻となり得るは家の貧き時なるべし、夫が尤も妻の愛に感ずるは此恐ろしき敵に迫られ玉ひし時ならん。わらは妻としての德を建てまく願ふ、妻とは女子が安樂を得る道なりとは、わらはの理想に非ず、妻の黄金の指輪は夫婿の熱汗なること、これわらはの尤も愧る處、況んや衆人の前に立ち、衣服の美をそれとなく誇るが如きをや、これ夫婿の躓なり、夫婿の重荷なり、所謂妻とは夫婿の係累にして其助力には非ず、これぞ寧ろ女子の愧る處ならめ、兎も角もわらはの愧る處は是れなり。汝に好むまゝの晴着と望むまゝの晩食とハ子入りの心地よき寢臺とを供せん程に余が妻たらずやと誘ひ玉ふ美男子のましますとも、願くはわらはの心動かざらんことを、女子は弱しとはエバよりの運命ぞかし、わらは深く愧づ、此等の誘惑のわらはを常に動かすことを、されど若し能ふべくばわらは答へ申さん、君よ亞米利加の貴婦人淑女こそ君を待ち申さんに、武士の血を受けしわらはには不向なる條件に候と、斯く言はゞ生意氣とや評さる可き、よし、覺悟の前にこそ、せめては今日の淺ましき女流の風潮に向て一矢放ちたし、才とや學とや學士とや博士とや新聞記者とや奏任官とや大農家とや、凡て

世話女房十二時（午後八時）

能く覺ねておいでよ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

無用の形なり名なり影なり、或は悪魔の誘惑なり、願くばたゞ一個の心、湛ふるに清温なる愛の泉を以てせられんことを。「人生感意氣、功名誰復論」とは男子がたの壯烈なる魂なるべし、女子が百年の身を他人に許すも願くは肉情のためならざらんことを。斯る卑俗なる誘惑のために一生の愛を賣らざらんことを。此貴き一生を斯る虚榮の墓に葬り去らざらんことを。故にわらは若し能ふ可くんば、たゞ愛あり、名もなく、たゞ德あり、富もなく、過去に光榮あらんより寧ろ將來に事業ある男子に此身と心とを永久に捧げんことを。わらはに空

世話女房十二時（午後十時）

オヤ私も寢入ッちやッた

想あらば是れぞ實に樂しき空想なり、一生の苦戰終り、わらは一足先きに此世を去りし後、夫の筆にて、『吾功名事業は爾の深厚なる慰籍と、倦まざる奬勵と、絶へ間なき助力とに由ること寔に多し』てふ數行の文字を碑面に書かれなば、わらはの滿足ぞかし、わらは實に此空想を以て亦た一個の虚榮なることを知る、されど彼の夫婿の名を自個の名の如くに誇り、夫婿の富を自個の汗より成りし者の如くに散じ、夫婿が獨力にて艱難辛苦して漸く占め得たる社會上の位置を自個の功の如くに利用し、或は以て他の女子を壓せんとする如きに比すれば、わらはの此空想と雖も如何に健氣なる空想ぞ、如何に壯烈なる空想ぞ、寧ろ或は、如何に高傑なる空想ぞ。されど是れ遂に空想たるを免ぬかれざるべし、虚榮の影の暗きを含むことを否み難し。夫婿の名譽はわらはの希望に非ず、夫婿の功業はわらはの勇氣と忍耐と慰籍とに非ず、わらはの愛に由りて夫婿の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

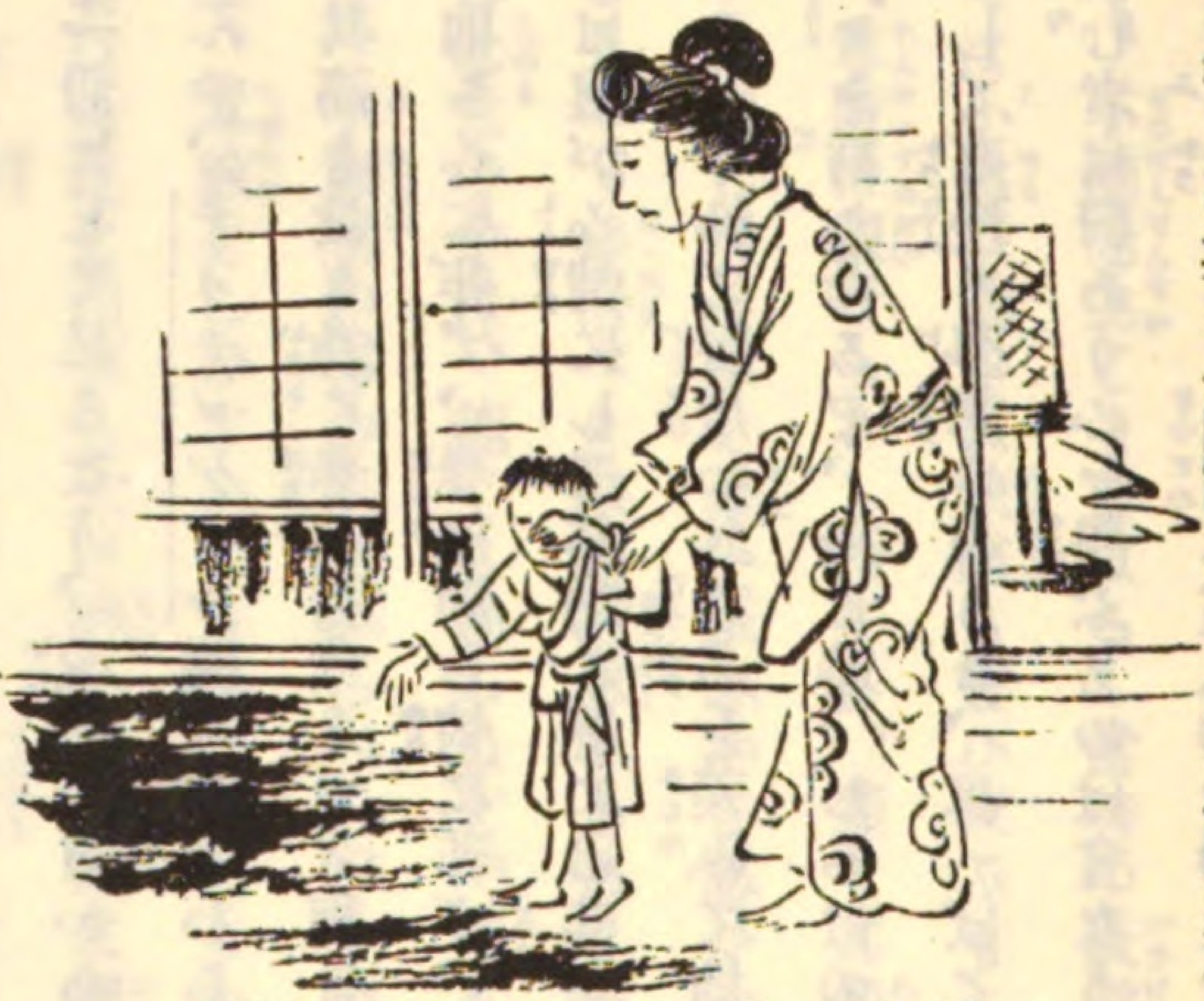
德進み、心和樂し、男らしく此の世を歩みたまふを得ば、わらはの幸福此上やあるべき、愛せられずとも、愛し得ば幸ひなり、愛し得る心情を有つものは神の特寵を受けし女子なり、わらはは亦た此の特寵に加はり得んことを。若し神のめぐみに由り、わらはの夫深くわらはを愛し玉はゞ、わらはは元より感謝を天に捧げん、夫妻相愛しなば人生亦何の求むる處ぞ、神より受くる幸福はこれにて足れり、此上は神の高恩にこたへ奉る程の善行美事を人の世に寄與し得んことのみ、こゝに希望あり、こゝに勇氣あり、こゝに平和あり、こゝに自由あり、浮世の不如意は寧ろ互の愛を增さゞらめや、されど斯く爲し得るは、わらはの心一つにありと思へば、わらはは女子に生れしことを誇るなり、此の世界を造り給ひしは神なり、國を立て給ひしは王なり、社會は自然に生立ちぬ、此等を外にして一個の世界、而一個の國、こゝには此の社會の恐ろしき風も入り兼ぬる樂園を造り得るものはわらはなりと思へば、わらは女子に生れしことを感謝す、斯く言ふは年若き乙女の浮きたに情熱の浮きたる聲にや、あらず、あらず、是れ眞面目なる、淚もて神に祈り奉るわらはの理想なり。わらはが筆の先少しばかり動くを如何に見玉ひけん、友の中にも師の中にも、わらはに望み玉ふに女流文學者として一旗擧げよとは如何に情なき勸告ぞ、小說作れ、詩作れ、議論書けなどすゝめ給ふは、質素なる家庭の王國に在りて謙遜温柔勤勉なる女主人なり母たるよりも、はでなる舞臺に上りて、寫眞版の見世物となりて、世の放蕩男子の浮氣なる賞

世話女房十二時　(午後十二時)

もう一つ何か忘れたやうだ

贊をよろこび受けよとすゝめ玉ふが如くに、わらはには受取らる、これわらはのひがみなるべし、されどひがみにてもよし、希くは斯る危険にわらはを誘ひ玉ふこと勿らんを、女子は沈默界の主人なりとかや、斯く聞きてわらは其中に無上の眞理と人情との含むが如くに感ず、愛情、謙遜、忍耐、平和、誠實、凡て此等の諸德は沈默界に在りてこそ始めて眞の光輝の燦然として美はしきなり、とわらは信ず、わらはは亦筆の樂を知る、故に若し

世話女房十二時（午前二時）



泣ないでサツサとおいでナ

嫁ぎし後、夫の許し玉ふならば、歌の一つも作り得ば作るべし、清き情のあふれし節には紙に寫し止むること、其暇だにあらば、これ亦可ならざるにあらず、されど偏へに願ふ、妻となり母となりて、人情の幽音悲調を涙もて聽くに先ち、淺ましき虚榮の影を追ふて何々女史の仲間入りせざらんことを、あせりて作りて譽められて賣られて買はれて笑はれて苦しむ人とならんよりも、神若し許し玉はゞ愛する良人と共に（嗚呼夢想よ）靜窓燈下、讀みて笑ふて泣て思ふて感じて樂む人と成らまほし、外國には貴き文學多し、若し能ふべくばユーゴー翁の「悲慘」、チーズチース詩仙の一冊、ホウ井チヤルの一冊、其他の三四卷も備ふることを得て、これ等の尊き聖者の高き感情と思想とに由り、わらはの品性高まり、道念堅く進み、苦き涙拭はれ、濁りたる血清められ、妻として母として更に美質を加ふるを得んか、何の幸福か此に如く可き。されど思ふ、これ亦

た贅澤なりと、貧しき家に在りて多くの子女を養はゞ如何で此等の贅澤を享くるの暇あらん、されど神に感謝す、如何なる場合にも尊き御文一冊を與へ給ふことを、涙もて路得記を讀みしこと幾度ぞ、わらけの文學は神の賜なる此の一冊にして足るなり、況んや自から筆とりて何を誇らんや、ナイチンゲール孃も亦たわらはの空想に非ず、其高き貴き功と譽は百代までも輝きてん、されど功は則ち心に非ず、譽は則ち情に非ず、羨むべく學ぶ可きは孃が心情にして其功と譽には非らず、とわらは、知る、されど幾度か其功名を羨みて地圖を開きてクリミヤを訪ふたるぞ、斯る時、わらはの心浮き立ち涙なくして高慢と夢想とありき、思へばこれ罰なり、功を羨む者は罰あり心を學ぶものは賞なりとかや、實も然り、不幸にして夫病み玉ふ時、靜に枕邊に侍し、其苦痛を分ち無聊を解き得る程の心情を神若しわらはに許し玉はゞナイチンゲール則ちわらはならずや、夫の友に病む人の在さば夫をすゝめて見舞はしむべし、わらはの友の愛兒病む時、笑ふて噂することとなくはわらはが家の譽にしてわらはの誇ならん。切に願ふはわが心の何處までも思ひやり深く、我慢の意地の横にのみ走りて方寸の間、光なく平和なく、にがき涙の常に堪へざらんことにこそ、此頃男の友の許より書狀來たり、其の中に、横井小楠先生の宿元に送りし文とて、下の句を書きぬきて示さる、「夜分酒給候折は泰吉など御許之事のみ咄し出し申候御許に居候えば、かんしやくも起り無理も申候え共客中にては唯々やともとゆかしく思ひやり候事のみ有之誠に困窮の至りに御座

世話女房十二時（午前四時）

オヤ〳〵こんなに踏みぬいで

候、」斯くて友の書き添へけるには、これで妻たるべき女子の能く〳〵味ふべき人情ならめと、實にわらはも此文讀みて男子てふもの、心のうち、如何計りやさしくも亦たかわゆく、小楠先生とも言はるゝ當時の豪傑も妻の家に在りては小供の如くに我儘も言ひだゞもこねられ、客となり、尊敬推戴せらるゝ時すら、却て其我儘言ひ、かんしやく起し得る家を慕ひ玉ふかと思ひやり、此處で妻たるもの〻心得べき深き消息あらめと感じにき、まことに此世の中は、能くも知らねど、荒き海の如き者ならめ、不如意の事のみ多かるべし、十が八九は失望ならん、其波をしのぎかくものは男なり夫なり、家は港、妻は此港を出來る丈け靜かに穩かに廣々と且つ美はしく造る役の者ならん、外の遠慮も不如意も、妻にかんしやくとなりて始めて胸のすく事もあるべく、其情を思ひやれば我儘言ふ夫を恨むは妻の我儘なるべし、わらはの願は此恐ろしき世の波より夫を守らんことにこそ。曾てわらはも思へらく、斯くの如く人の妻となりて心をいためんよりも、獨身にて國家のために此身を捧ぐるに如かずと、實に獨身とは今も學窓の下に行はるゝ流行文句ぞかし、されど是れ女子のための咀にわらずや、とわらは感ずるに至りしことを神に感謝し奉る、神よ願くは妻てふ特權をわらはにも與へ賜へ、母てふ榮譽をわらはにも下し賜へ、「獨身」てふ夢の裏には「女丈夫」てふ影あり、わらは已に此影を追ふて疲れはてぬ、神よ願くは貧しき人の妻として、三人の小供の母として、主に由りて歩む女子たらしめ玉へ、青史に輝く「女丈夫」を我儘なる十八才の眼に描きて、四十才の面に不貞不信姦婦てふ泥土を塗ることと無からしめ玉へ、德を衷に懷き外には謙遜の目立たぬ衣着せ玉へ、獨身、國家、公共、女丈夫、わらはは此等の文字を懼る、野に出でゝ歩む時、彼處に老嫗の孫に伴はるゝを見る、これ羨ましき見物なり、其

稚き孫と其老たる媼との間には長き歴史ありて此地上に於ける媼の戰を語るなり、媼は女丈夫なり、彼女の勝利の獲物は手にひく可愛き孫に非ざるか、と此等の理想する處を打明けて嫁ぎし姉を訪ふて語りし時、姉は其兒を膝にして曰はれけるには、此等も亦た年若き御身が學窓の下に描き出したる詩的空想ならめと、わらはの曰く、年若きもの誰れか空想を描かざるべき、たゞ高きを理想といひ、卑しきを誘惑とや申さん、高き理想を懷かば躓く事まれにして、遂に其半にも至ることありなん、たゞ覺悟こそ第一ならめと、姉の曰く、さればなり、其覺悟とは何者ぞと、わらは、覺悟とは覺悟なり、何時も／＼心に此等の理想を念じ誘惑に勝たんものと心がまへこそ則ち覺悟ならめ、其外にあらば敎へ玉へ、姉、忍耐こそ第一の覺悟なり、たゞ／＼忍耐、姉が御身に敎へ得るものはこれのみ、わらは姉の敎への餘りに平凡なるに驚き、愛は忍ぶことを爲すと申さずやと答へし時、姉は嘆息つきつゝのたまはく、然り、愛は忍ぶことを爲す、これ理想なり、されど忍ぶこと則ち愛なり、これ實際なり、幾年か後には御身も或男子の妻たる可し、御身の理想は其時より實際に入るなり、實際に入りし後、あらゆる空想の衣去りて一個の理想、裸體のまゝ現はれ來る、曰く忍耐則ち愛なり、不情、貧困、疾病、其他無數の意想外の敵、足下より飛び立たん、此時、たゞ忍ぶ事、則ち愛することなり、勝つことなり、而して後御身の今日は理想はじめて成りなば成るべし、凡ての理想に美はしき衣を着せ玉ふ勿れ、困難と雖も貧苦と雖も不情と雖も、預想する時は敵ながら望ましき敵の如くに見ゆ、實際之れに衝突し來る時は、左程に面白き者にあらず、こゝぞ忍耐、則ち大なる眞の愛なり、女子第一の德なり、とわらは此頃少しく思ひ當りて神に感謝し心甚はだ樂し、酒癖ありて極めて氣むつかしき武士のもとに嫁ぎ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し婦人ありけり、數十年の長き間、此婦人遂に樂しき日てふものを有せず時に打れ時に罵られ、憂苦慘憺の中に日夜を送りしが、飽くまで耐へ忍び、忍び〳〵て遂に病み、一言の恨なくして此世を辭しぬ、さて然る後、彼夫婦の武士、はじめて其不情なりしに思ひ至り、百悔千恨、殆んど狂ずるまでに及び、人物一變して昨日の氣むつかしき酒飲、忽ち親切温耳の好き翁となり、涙ながらに逝きし妻の眞實、貞操、堅忍を語り、年若き婦人を泣かしめたりとぞ、これ事實なり、忍耐ほど壯烈なる德は非ず、女子を男子に上になすものあらば、たゞ此德のみ、女子若し男子に勝るといふを得ば此德にて勝るなり、わらは彼婦人の心情を思ひやる毎に其尊さ、いじらしさ、拜みたき心地ぞする、これは夫婿の不情に勝ちたる忍耐の例なれども凡百の誘惑困厄合圍し來る時、たゞ忍耐を以て當り玉へかし、實に此覺悟こそ御身の高潔なる理想の理想と知り玉へと、姉は猶も自身逢遇の實例など語り玉ひしと雖もこゝには擧けず、わらは眞に姉の教に深く感動したり、姉こゝに於てをこがましくもわらはの理想と姉の教とを記して更に未知の友の數を乞はんと願ふのみ。

美風ある小學校及生徒

◎幼き慈善者　岡山市磨屋町藥師院に住める哀なる孝女お花が事は精しく本紙に記しつるが此孝女のやさしき行に感じて玆に多くの幼き慈善家を出しぬ或る日同縣川上郡高倉村修齋尋常小學校にて修身の談話ありし時教師はお花が孝行の有樣を落なく語り聞せたりしに生徒は何れもいたく感動して中にはホロ〳〵と涙をこぼすものさへありけり斯くて其翌日となりければ多くの生徒等は云ひ合はせたらんやうに壹錢或は貳錢の銅貨を持ち來りて先生是を孝女お花に贈つて玉はれとて教師に渡しけるに教師は此幼き慈善家のしほらしさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に感じ入りし扨もやさしき御身等が志かな去りながら此金は如何にして得つるぞと問ひければ何れも愛らしき顔見合はせてお父さんから貰ひましたお母さんが呉れました私は祖母さんに僕は兄さんからと口々に答へけり教師は重ねて、さらば此金をお花に贈らんこと思ひもよらず人に貰うた金を人に惠むとは不都合なり假令壹厘にても貳厘にても御身等が働いて儲けし金をこそお花の喜んで受く可きなれと勵して持ち來れる銅貨を返しければ生徒等は一入感激して其後或は麥藁を組み或は薪を採り其他小さき腕にかなへる仕事して壹錢貳錢を儲け得て敎師の許へ持ち來りしもの二十人總金高貳拾八錢なりしかば敎師は殊の外感賞してお花が許へ贈れりとの事云々（大坂朝日）

內務省衛生局長 後藤新平君序
京都看病婦學校敎授 フレーザー著
京都看病婦學校敎授 成瀬四壽譯

新刊 **實用看護法**

挿畫三十余入 三百八十頁

上製 五十錢 郵税八錢　並製 四十錢 郵税六錢

本書は專ら看病の業に從事し、又は看護法を知らんと欲する者の爲に、簡明なる文躰に傍訓を添へ、看病婦の資格及義務、病室の撰定、食物の與え法、藥の與え法、躰温、灌腸、洗浴、按摩等、章を十六に分ち丁寧に敎示解明したるものなり、特志者は殊に之を讀んで此學の知識を加ふるの必要あり、又一般普通の人々も坐右に備へざる可らざる良書なり、救世養身に意ある人幸に一本を需められよ

發兌元 東京々橋區出雲町一番地 **警醒社書店**

● **速記法** 自宅獨習生 **募集** 月謝二十錢 二ヶ月卒業
規則入用者は郵券二錢を投ずべし
● 東京下谷區徒士町二丁目三十一番地 **速記學專修所**

本社電話番號七十番

勝海舟伯題字 弘松宣枝著

再版 **阪本龍馬**

肖像並に手翰石版刷り入
定價 拾五錢
郵税 四錢

◉毎日評　弘松宣枝氏の筆に成り例の民友社より發兌す龍馬はそれ土佐人の最も完全したる典型ならんか其例舌の雄快は後藤象次郎に類して意志の堅剛これに過ぎ僅々十年に滿たざる公生涯には幾多の波瀾あり幾多の曲折あり悲を曰へば悲の極喜を曰へば喜の極を盡くし眞個快絶壯絶の歴史なり本書はこれを叙する簡にして要を得たり

◉中央評　維新革命の當時に在つて西郷木戶と名を均くせし坂本龍馬氏の傳記なり氏の傳記聽きに坂崎氏の汗血千里駒ありと雖も其小説躰の結構筆致の故を以て多く婦幼の玩ぶに止まり他此偉人の爲に氣を吐く者少れに其事業性行漸く世人に忘れられんとするの時此著作を見る流麗有趣の筆能く當時の情勢と坂本氏の面目を描き得たり吾人は著者の勞を多とせすんばあらず

◉敎育時論評　是れ明治維新の先導者、土佐の勤王家たる阪本龍馬の小傳なり。先づ土佐の勤王論が。山崎流の朱學によりて發育し、谷仁山によりて成長したるより說き起し、次に龍馬が少年時代青年時代の摸様を、當時の時勢と共に並せ寫し、次に土州の志士武市半平太、吉村寅太郎の生涯を略叙し、一轉して勝海舟と龍馬との關係を說き、再轉して薩の聯合、伏見の遭難を寫し、夫より海援隊、小倉の役、汽船の衝突、大政返上、最後、中岡愼太郎の人物を紹介し、遂に家庭に於ける龍馬、及其人物に至りて卷を終る。而して著者は、實に龍馬の近親に當れりと云ふ。讀者をして龍馬の一斑を知らしむるには遺憾なかるべし。

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 **民友社**

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

	一冊	金五錢	郵稅五厘
定價	半年(十二冊)前金五十錢	地方共	金五十六錢
	一年(廿四冊)同金一圓		金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰)一回ニ付金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人 吉崎圓吉
編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿五年九月十四日遞信省認可

○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり瘦せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる**スコット乳菓**が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虛弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に**虛弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○**咳嗽及風邪**○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を瘦せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虛弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の說明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す

左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	島居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA